

ほくの「一口チャレンジ」

一年一組 松井 優河

ほくは、やさいがとってもきれいです。すきじゃありません。ほいくえんのときには、ほとんどたべられませんでした。でも、小学校一年生になったので、がんばってたべようときめました。

ほくは、学校でべんきょうするじかんよりも、きゅうしょくのじかんがいちばんいやです。みんなは、きゅうしょくがすきかもしれないけれど、ほくは、まい日どきどきふあんなのです。なんでかというところ、やさいのおかずがまい日出るからです。ほくのおさらにとんとたぐさんのやさいがのっています。ピーマンとかにんじんとかトマトとかなすとか、まい日なにかが入っています。ちょうりいんさんが、いつばい入れてくれるけど、やさいは、どれもにがかったりすっぱかったりするのです、ほくのときです。

やだなあ、へらしたいなあとおもいながら、先生のところについてへらしてもらいます。すくなくなれば、がんばってたべられるときもあります。でも、たべられないときもあります。

「ううん、しかたない。おのこししよう。」

ここには、ママがいなければなりません。おこられないからラッキ―です。

じつは、いえでは一年生になってから「一口チャレンジ」といって、ママがかつてにつくったルールがあります。

「このおさらは、ゆうのだからね。」

と、ママがいったおさらを見ると、サラダとおかず、いろいろなやさ

いがこずつ、小さくきられてのっています。がぶつと一口たべてみました。

「まずっ。」

一口目はまずく感じて、もぐもぐしているうちにすこしおいしく感じることもあります。たべることができても、できなくても、

ほくがチャレンジすれば、いつもママは、

「すごいね。えらいね。がんばったね。」

といってほめてくれます。でも、ぜんぜんへっていないときは、

「ねえ、たべたの。ほんとうにたべたの。」

となんかいきかれてしまいます。

やさいをたべると、からだが大きくなるらしいです。おにいちゃんみたいに大きくなりたいから、やっぱりママのためにもほくのためにも、まい日がんばってたべようとおもいます。きつとママがうるさくいうのは、ほくのためです。「一口チャレンジ」をすれば、ママはすこくよろこんでくれるので、学校でもいえでも、これからも「一口チャレンジ」をつづけていこうとおもいます。

※ 優河さんの「一口チャレンジ」にたいする気もちが、すなおにかかれています。チャレンジをつづけていると、やさいもおいしくたべられる日がきつとくるとおもいます。 (近藤 利枝)

ほくのおとうとはふたご

一年二組 石川 大嘉

ほくには、四さいになるふたごのおとうとがいる。おとうとたちは、ふたごなのに、かおがにいていない。ほくは、おかあさんにきいてみた。

「なんでかおがにいてないの。」

「にらんせいのふたごだから、かおとせいかくがちがうんだよ。」

ほくが小さいとき、二人のかおのちがいがわからなかった。だけれど、いまはすぐにわかる。ふたごのおにいちゃんは、アーくん。おとうとはソーくん。アーくんとソーくんはまったくにいていないのに、二人ともほくにはにている。ほくのかおにそっくりなアーくん。ほくのせいかくにそっくりなソーくん。アーくんといっしょにあそんでいるとみんなに、

「たいがとかおがうり二つだね。」

といわれ、ソーくんがほんのすききらいをすると、おかあさんに、

「むかしのたいがは、ほんとうにごはんをたべるのがきらいだった。

だから、たいがににている。」

といわれる。ふたごはにいていないのに、ほくにはにいていて、なんだかおもしろい。

ふたごはよくけんかをする。一つのおもちゃをとりあったり、すきなおかしをとりあったりする。ふたごなのに、なかよくないのかなあとおもうときもあるけど、いたずらをするときは、とつてもなかよし。ほくやおかあさんをおどろかすときは、にやにやしたかおで、二人でかくれている。ならんだ二つのかおはとつてもかわいい。

ほくもときどきいっしょにけんかをするときがある。二人が、ほくがやっているゲームをとってきたり、ほくがだいじにとつておいたおかしをたべたりするから。もう、アーくんとソーくんとはあそばないとおもうときもあるけど、ほくだけ小学校がおやすみでアーくんとソーくんがようちえんにいくと、おうちがしずかでつまらない。こえがしないときびしい。やっぱりだいすきなアーくんとソーくん。いっしょにあそぶといちばんたのしい、かわいいふたごのおともだち。これからも、ほくといっしょにたくさんあそぼうね。

※ 大嘉さんがおとうとのアーくんとソーくんをたいせつにおもう気もちがとてもよくつたわってきました。これからもかわいいふたごのおともだちとなかよくすごしてくださいね。

(高木 詞音)

ピアノのはっぴようかい

一年三組 上平田 莉々

「どきどきしてきたよう。」

七月二十二日、ピアノのはっぴようかいがありました。おかあさんになんどもはげしてもらいながら、じぶんのじゅんばんがくるまで、ずつとどきどきしながらまっています。ぶたいの上に立つと、みんながわたしのほうを見ていました。わたしはきんちようしたけれど、みんながおうえんしてくれているような気がしました。

はっぴようかいのれんしゅうは、四月からはじめました。「かわい
いオーガステイン」と「森のきつつき」の二きよくを、まい日、おかあさんにおしえてもらいながられんしゅうをしました。とう日まちがえたら、かなしい気もちになってしまう。たくさんれんしゅうしたら、上手にひけるようになるかなとおもい、まい日十かいいじょうひくときめました。でも、むずかしいきよくなのでなかなかひけるようにならなくて、おかあさんとなんかいもけんかをしてしまいました。とくに、「森のきつつき」のスタッカートがむずかしくて、おかあさんにちゅういされるのがいやでした。ひけないときは、おかあさんに音がきこえないようにヘッドフォンをつかって、こっそりとなんかいもれんしゅうしました。

「おかあさん、きいて。」

わたしは上手にひけるようになると、おかあさんとなりによんで、きいてもらいました。けんかをしたときは、おかあさんなんかいやだという気もちになって、ピアノのれんしゅうをもうやめたいとおもつ

たときもありました。でも、おかあさんにとなりにすわってきいてもらって、

「じょうずにできたね。」

とほめてもらったときには、やる気がどんどんわいてきました。

はっぴようかいの日は、いちばんさいしょの音をまちがえてしまいました。でも、どうしようとおもわないで、つぎの音からおちついてひくことができました。さいごまでのしくピアノをえんそうするところができたのは、はっぴようかいの日までにいっしょうけんめいれんしゅうをつづけてきたからだとおもいます。立ち上がっておじぎをしたとき、みんなの大きなはくしゅが、パチパチパチとホールぜんたいにひびきました。がんばったねとほめてもらったようで、とてもうれしかったです。はっぴようかいがおわってから、おとうさんとおかあさん、おじいちゃん、おばあちゃんに、

「すごく上手だったよ。」

とほめてもらえました。

なきながられんしゅうをした日もあったけれど、がんばってれんしゅうをしてきてよかったなとおもいました。ピアノをやめたいとおもった日もあったけど、らい年のはっぴようかいでも大きなはくしゅをもらえるように、これからもピアノをがんばりたいとおもいました。そして、大きくなっておかあさんになっても、おばあちゃんになっても、ピアノをつづけていきたいです。

※ つらくてもくじけることなく、いっしょうけんめいれんしゅうをしてきたことがよくつたわってきました。これからも莉々さんのピアノのえんそうで、たくさんの人をえがおにしてくださいね。

(都築 あやめ)

レベルアップ

一年四組 山田 紬希

わたしがなつやすみにがんばったことは、ほじょりんなしのじてん車にのれるようになったことです。じてん車は一年まえのおたんじょう日にかつてもらったのに、ずっとやる気がおきなくて、ほこりをかぶってしまっていました。さいしょ、おかあさんにうしろからおしてもらってこいでみました。おかあさんが手をはなそうとすると、すぐぐらぐらしてしまつてころびそうになり、ちつともくれませんでした。わたしは、いっぱいれんしゅうをしようとおもいました。

二かい目はさくせんをかえました。じぶんでじめんをけつて、バランスをとるれんしゅうです。でも、手がぐらぐらして、まえのものにぶつかりそうでこわかったし、すぐ足がじめんについてしまいました。わたしはもうやりたくないとおもったけど、なんかいもやったらたのしくなってきました。じめんをけつてバランスがとれるじかんがながくなり、とおくへいけるようになってきたからです。わたしは、ちよつとじしんがついてきました。

「おかあさん、やってみるね。」

わたしは、足をペダルにのせていっぱい力を入れました。

「すごい、のれる。」

きゆうにじてん車が、車みたいにはやくなりました。ぐらぐらがなくなつて、こわさがなくなりました。ついにのれるようになって、うれしい気持ちになりました。

なつのじてん車のれんしゅうは、あつくてあせびつしよりになつて

とてもつかれたけど、じてん車にのると、かぜがからだにあたつて気持ちよかったです。

じてん車はじぶんの足ではしるよりも、ずっとはやくとおくにいきます。わたしは、一人でだがしをかいにいつてみたり、とおくはなれたおばあちゃんににいって、おばあちゃんをびっくりさせたりしたいです。つぎはもっとむずかしいことにちようせんしたいです。

※ いっしょうけんめいじてん車をれんしゅうする紬希さんのよ
うすがよくつたわります。これからもいろいろなことにちようせ
んして、レベルアップしていつてくださいね。 (濱崎 文香)

はたらく大人とわたしの生活

二年一組 大井 さくら

七月の、よく晴れたあついい日。わたしは、おばあちゃんの家にもう車の中で、外のけしきをぼんやりと見ていました。あつそうだなと思っていると、道ろ工じのおじさんが、いっしょうけんめいはたらくすがたが見えました。おじさんたちは、みんなあせびっしりで、たいへんそうだなと思っていると、お母さんが、

「この道ろがかんせいしたら、おばあちゃんの家に行きやすくなるね。」

と言いました。わたしは、大すきなおばあちゃんの家早く行けるようになるなんてうれしいな、工じの人ありがとう、という気持ちになりました。

そして、今まで考えたことがなかったけれど、いつもつかっている道ろも、こんな風にたくさんの人が、いっしょうけんめいはたらくにつくってくれたものなんだと気づきました。

道ろだけじゃなくて、今きているふくも、今のっている車も、大切なランドセルや大すきな本、それから家やお店など、わたしのみの回りのものぜんぶがわたしの知らないところで心をこめて作られているんだなど、かんしゃの気持ちでいっぱいになりました。

いつもは、むいしきにいろいろなものをつかって生活しています。でも、たくさんの大人の思いがとどいてわたしたちの生活をいろどっています。そのことをわすれないように、心のまん中においておきたいです。

そんなことを考えていたらお母さんがいつも

「ものを大切にしなさい。」

と言っている理由が分かったような気がしました。

よの中にはたくさんのしょくぎようがあつて、はたらいている人がたくさんいます。はたらくということは、わたしにはそうぞうできないくらいたいへんだと思うけれど、どんなしごともせかいのどこかでだれかのやくに立っています。

わたしも大人になったら、どこかでやくに立ったり、だれかをえがおにしたりできるようにいっしょうけんめいはたらくたいです。

※ はたらくことのすごさと大切さに気づくことができましたね。

二学きに入ってからクラスのしごとを手つだうことがさらに多くなつたように思います。思ったことを行どうつすことができずばらしいですね。

(間宮 圭太)

さようなら、ぼくのおもちゃ

二年二組 増山 大誠

「ねえ、また、おもちゃかたづけてないよ。」

「後でかたづける。」

「後って、いつやるのかな。いつもいつもかたづけてなくて、お母さんがかたづけてるよ。これじゃあ、大せいのおもちゃたちは、ないてるな。」

ぼくは、むかしからかたづけができなくて、何でもお母さんにおこられてきた。分かっているんだけど、それでもできなくて、二年生になってもおこられる日がまだまだある。ほいく園のときや小学校みたいに、お友だちといっしょにやるかたづけはできるのにな。家で一人でやるかたづけは、何でできないんだろう。だから、ぼくのおもちゃたちは、ゆかにおちていてふまれてしまったり、すみっこでほったらかしくなったりしてほこりがつもっている。

ある日、お母さんがこう言った。

「大せいのおもちゃたちね、もうつかってないおもちゃがたくさんでへやがごんどんせまくなっていくし、おもちゃたちがさみしそうですから、お母さんのお友だちの子どもにあげてもいいかな。」

「お友だちってだれ。いやだよ。あげないよ。ぼくのものだもん。」

ぼくは、おもちゃをだれにもわたしたくなくてことわった。

「お母さんのお友だちの子どもはね、まだ小さくて毎日おもちゃであそんでるんだって。」

「そうなんだ。ぼくも小さいとき、毎日おもちゃであそんでいたもん

な。その子は、おもちゃがすきなのかな。」
ちよつとその子のことが気になった。

ぼくのおもちゃたちは、かたづけもできていないへやでぐちゃぐちゃになって、ぎゅうぎゅうにつぶされてちよつとかわいそうに思えてきた。でもなあ、ぼくのおもちゃだし、あげるのはちよつといやかもなあ。ぼくは考えた。考えて、考えて、少しなやんだ。それからきめた。ぼくのおもちゃたちで小さい子がよろこんでくれるならあげる。ぼくがすきだったおもちゃたちは、今はもうぜんぜんあそんでなくてかわいそうだよね。

「お母さん、ぼくのおもちゃたち、さいしょはあげるのがいやだったけど、あげてもいいよ。」

お母さんにつたえた。

そして、いろんな形を作ってきたブロック、お兄ちゃんのごっこあそびをした人形、車がすきでたくさんあつめたおもちゃの車、何でも何でもならべてはやくできるようになったパズル、絵で楽しんだ本たちをお母さんがまとめてもって行った。

数日後、

「大せい、見て。」

お母さんがけいたいを見せてきた。そこには、どう画がながれていてぼくのおもちゃたちが、小さな子にあそんでもらっていた。

「ありがとう。」

と、小さい子が言ってくれた。ぼくは、うれしい気もちとほつとした気もちといい気もちばかりだった。

ぼくのおもちゃたち、今までありがとう。さようなら。まだまだ、たくさんあそんでもらってたね。

※ 小さいときにいっぱいあそんだ思い出のつまったおもちゃたち。そんな大切なおもちゃをあげるのは、いやだという気もちがつたわってきました。でも、考えてなやんで自分よりおもちゃをひつようとしている子にあげようとけっしんした大誠さん。おもちゃはなくなっても大切な思い出は、大誠さんの心の中に生きつづけることでしょう。

(脇田 富久代)

こっせつして分かったこと

二年三組 久保 彰梧

「いたいよう。」

十二月十日。ぼくは、道ろでスキップしていた。すると、道ろのだんさでつまずいて、ぼくの体が回てんした。そして、思い切り右ひじをコンクリートにうちつけてしまったのだ。そのとき、いたすぎてなみだがたくさん出た。

ぼくのなき声におどろいて、お母さんがすぐにとんできた。お母さんは、

「だいじようぶ。」

と心ばいして声をかけてくれた。しかし、お母さんは、

「ただぶつただけだから、だいじようぶ、だいじようぶ。」

と言うだけだった。ぼくは、まるで右ひじがなくなつたようないたさだったのに。その後も、ずっといたくて、

「いたい、いたい。」

とお母さんにつたえたら、

「うでは上がる。」

と聞かれたので、うでを上げようとした。でも、うでは上がらない。

「ちよつとふくを上げるよ。」

と言われ、お母さんがふくを上げようとしたときも、いたくてたまらない。

「ああ、ちよつとはれてきているね。びょういんに行った方がいいかな。」

それから、いそいでびょういんをさがしたけど、どこもやっていなかった。あんどじようこう生びょういんへむかった。びょういんに行く車の中で、

「ほねがおれていないといいな。」

と、お母さんが言った。

「ほねがおれていたらどうなるの。」

「ギプスをして、しばらくは右手がつかえなくなっちゃうかな。」

それを聞いて、ぼくはぜったいにいやだと思った。左手で字を書かなくてはいけないし、ゲームもやれなくなってしまうからだ。ほねがおれていませうように……とねがっていた。

しかし、ねがいはとどかず、ぼくのほねはおれていた。かなしかつた。

つぎの日、せん門の先生にみてもらうと、

「手じゅつをしないといけません。」

と言われた。先生からは、

「こわいよね。でも、ねている間におわってしまうからだいじようぶだよ。」

とあん心させてくれた。でも、ぼくは手じゅつなんてこわいからいやだな、という気もちでいっぱいだった。それから、きんきゅうで入いんをし、つぎの日に手じゅつをした。手じゅつは、本当にねている間におわり、目がさめたらお母さんがいたのであん心した。

手じゅつもたいへんだつたけれど、それい上に、その後の生活の方が大へんだつた。それは、地ごくの左手生活がはじまつたからだ。ごはんを食べるのも字を書くのも、ふくをきるのも。どれも今まで当たり前につかえていた右手がつかえないのは、とてもつらかつた。

そんな生活を一月がんばり、一月十一日についてギプスがとれた。

やっと、前とかわららず右手がつかえるようになって、とてもうれしかった。りょう手がかえるって、すごいことだなと分かった。

今回はじめてこっせつをして、こっせつのいたみ、入いん、手じゅつ、ギプス生活と今まであじわったことのないことばかりだった。できないことが多くてもたいへんだったので、もうこっせつはしたくないけれど、これらのことは、けがをしなければできなかったけいけんだ。このけいけんを生かして、これからギプスをしていたり、まっつばづえをついていたりしている人を見たら、たすけてあげたいと思う。

※ こっせつという、たいへんなけいけんをしてしまいましたね。

右手のつかえないたいへんさ、りょう手のつかえるしあわせが、分かったので、こんどはけがをしている人を気づかっていきたいですね。

(鈴木 菜穂子)

えい語がしゃべれたら

三年一組 中川 七乃葉

わたしには年がはなれているとこのお姉ちゃんがいます。お姉ちゃんは二十三才で、今はアメリカの大学院で勉強をしています。今年の夏に、お姉ちゃんはけっこうんしたい人を日本につれてきました。家族にしようかいつするためです。けっこうんしたい相手は、イギリス人でマテオという名前です。マテオとは、テレビ電話で何回かあいさつをしたことがあったので知っていたけれど、会うのははじめてなのでわたしはすごくどきどきしていました。わたしはマテオと会ったときにたくさんおしゃべりができるように、あいさつの仕方や自分の名前を英語で言う練習を何回もしました。

やっとマテオに会える日になりました。一番さいしょに、わたしの家に来たので、わたしは、

「ハロー」

とあいさつをしたけれど、その後は少しはさしくなって声が小さくなり、あまり上手に言えませんでした。でも、マテオがにこにこしながら待っていてくれて、やさしい人だなあと思っただけで大すきになりました。その後、みんなでおかしを食べたり、スイーツのゲームをしたりして、とても楽しかったです。

二週間しか日本にいなかったけれど、いっしょにぎふのおばあちゃんの家に行ってほう事をしたり、みんなでごはんを食べたりもしました。西尾まつりにも行っただけ、日本にいるさい後の日がマテオのおたん生日だったので、たん生日会もしました。

「なあちゃん。」

と、わたしのことをたくさんよんでくれたし、お出かけのときはずつと手をつないでくれたのがうれしくて、もっともつとマテオのことが大すきになりました。

でも、手をつないでくれたけれど、わたしはえい語が分からないし、マテオも日本語が分からなくて、ぜんぜんおしゃべりができなかったのがすごくさんねんでした。本当は西尾まつりで金魚すくいのやり方を教えてあげたかったし、日本のおいしいおかしや西尾のまつ茶もしようかいつしたかったです。ほかに、

「日本はどうだった。」
とか、

「日本の食べ物で一番すきな物は何。」
と聞きたかったです。

だからわたしは、どうしてもえい語をしゃべりたくなくなりました。今度マテオに会ったときに、えい語でおしゃべりができるように、たくさん練習したいと思います。えい語のじゆ業ではもう少し真けんに勉強したいし、えい語のアニメも見てみようかなと思っています。分からないえい語は、お兄ちゃんやお父さん、お母さんに聞いて、分かるようにしたいです。今はまだえい語が分からないけれど、えい語がすらすら言えるようになったら、いろいろな国に行ってみたいです。そして、いろいろな国の人と友だちになりたいです。

※ マテオとはじめて会った日の様子や、七乃葉さんの心のへん化がとてもつたわってきました。次に会うときまでに練習をつんで、少しでも多くえい語で話ができるといいね。

(手嶋 唯人)

なりたかったリレーせん手

三年二組 山本 夏寧

今年はずっとなりたいいな、なれるといいなと三年生になってずっと思っていた。今年こそリレーのせん手になりたくて、家の前でダッシュやスタートの練習をした。お母さんがいっしょに走ってくれたり、走っているすがたを見て、お父さんが、

「もつとうでをふって。前をしつかり見て。」
とアドバイスしてくれたらしい。

学校でリレーせん手を決める日、やりたい人がたくさんいた。二人ずつ半しゅう走って、タイムを計ることになった。わたしは、男の子と走ることになった。ぜったい勝ってやると思ってた。走り出したけれど、男の子はとて速くてぜんぜん追いつけない。さい後まで追いつくことができず、負けてしまった。ああ、これだとリレーせん手になれないかもしれない。少し悲しくなった。

数日後、先生からリレーせん手の発表があった。どきどきしながら話を聞いていたら、わたしの名前がよばれた。もうだめかとも思っていたので、やった、早くお父さん、お母さんに知らせたいなと思った。家に帰って、家族につたえたら、とてもよろこんでくれた。

「ど力したことが、けっかにつながってよかったね。」
と言ってくれた。がんばって練習してよかったと思った。

運動会の本番に向けて、いっぱい走る練習をした。学校のトラックを走って、内がわを走る練習や外がわから追いつく練習など、お母さんがつき合ってくれた。二人とも半しゅうを走りきると息がはあはあ

となつて、とてもつかれた。それでも何本もダッシュしてがんばった。

運動会当日は、かご島や安じようのおじいちゃんおばあちゃんもわたしのがんばりを見に来てくれた。一番さいしょにあったときよう走は、とてもどきどきしたけど、うまくスタートできた。一生けん命前を見て、む中で走ったら、一いになれてとてもうれしかった。台風の目もわたしたちのクラスは本番一いになれた。

いよいよリレーのじゅん番がやってきた。一年生の女子がスタートした。

「がんばれ。がんばれ。」

と、あちこちからおうえんの声が聞こえてきた。わたしたちのチームは、黄緑色のビブスで、今一いだ。ところがだんだんぬかされて、四いになった。きんちようしてきた。ラインに立ってバトンをもらうじゅんびをした。二年生男子にバトンがわたった。どんだんわたしに近づいてくる。よし、出番がきた。あと少し、がんばって。そう思いながら、少しずつ手を出して走り出した。練習したとおり、バトンをしっかりとつかめた。バトンを持って、足で地面をしっかりとって、うでもいっばいふって、前だけを向いて走った。バトンをもらうてすぐ一人ぬかせた。やった。まだまだいくぞと思った。目の前にもう一人。せ中を一生けん命に追いかけた。どんだん近づいてきた。外がわから追いつくそうとしたけれど、ぬくことができず、同じくらいで、アンカ一の男の子にバトンをわたした。ああもう一人ぬかしたかったな、くやしいなと思った。

走り終わった後、おじいちゃんやお父さんたちが、

「がんばったね、すごかったよ。」

「さい後、もうちよつとでぬかすことができそうだったよ。」
と言ってくれた。みんなに自分の走りをほめてもらえてうれしくなっ

た。赤組が負けてくやしかったけど、全力でがんばった。楽しい運動会だった。来年もリレーせん手になりたいな。

※ リレー選手へのあつい思いが文章からよく伝わってきます。リレー選手としてたくさんの方を重ね、本番では素晴らしい走りを見せてくれました。これからも多くのことにちようせんし、自分のせい長へつなげていってほしいです。 (大嶋 初音)

ずっといつしよだよ、チョコ、ネネ

三年三組 小笠原 良輝

ぼくには、チョコとネネという二ひきのあい犬がいます。チョコはすごく元気で少しどじな七才のおす犬。ネネは、とてもおりこうでかわい九才のめす犬。ぼくが一才の時からいつしよにくらしている大切な家族です。お母さんとぼくの二人と二ひきです。昨日が、ずっとつづくと思っていました。でも、ぼくが五才になった時、おじいちゃんの家近くに引っ越しをすることになりました。新しい家は、なんとペットをかってはいけないきまりがあります。

「なんで。どうして。」

ぼくは、悲しい気持ちでいつぱいでしたが、いつしよに住めない理由をお母さんが教えてくれ、けっきょくチョコとネネはおじいちゃんの家でくらすことになりました。

「チョコとネネ、さみしがっていないかなあ。」

「本当にだいじょうぶかなあ。」

「たまにしか会えなくなるなんていやだな。」
とさみしくて仕方ありませんでした。でも、チョコとネネはおじいちゃんの家にもすぐになれて、みんながかわいがってくれるので、幸せそうです。だからぼくは安心しました。

学校から帰ると、ぼくはほとんど毎日おじいちゃんの家によって、チョコとネネに会いに行きます。

「ワンワンワン。」

よくほえる二ひき。ゲージのすき間から顔をできるかぎり出して、

ぼくを見ってきます。まるでお帰りとつたえてくれているようです。ある日、ぼくがいつも通り学校から帰ると、お母さんが悲しそうな顔をしていました。ぼくはなんだかどきっとしました。

「ネネが病気になっちゃってね、入院しちゃったよ。もしかしたら死んじゃうかもしれないんだって。だから、みんなでお見まいに行こうね。」

と、お母さんが言いました。

「死んじゃうなんて。」

ネネが死んでしまうことを考えたことがなかったので、頭が真っ白になりました。きのう会った時はとても元気だったので、しんじられませんでした。

その日の夕方、お母さんとおじいちゃんとおばあちゃん、そしてチョコもいつしよにネネのお見まいに行きました。

たくさんのきかいがついたハウスに入れられ、ぐたっとしているネネを見て、

「ネネ、もうすぐ死んじゃうのかな。」

と、ぼくは心配でとても悲しくなりました。

それから、ネネは毎日ゆ血をしたり、注しやをしたりしてがんばりました。ぼくも毎日お見まいに行きました。チョコも、あいぼうのネネがいなくてさみしいのか、少し元気がありません。ぼくは、

「ネネの病気がなおって、早く家に帰ってこられるといいね。」
とチョコと話しました。

それから三日がたち、ネネの病気もきせきてきによくになりました。入院して八日目の夜、ぼくたちがお見まいに行くと、病院の先生が、
「ネネちゃん、だいぶよくなつたよ。あと二、三日でたい院できますよ。」

と言いました。

「よっしゃあ。」

ほくはすぐうれしかったです。

ネネのたい院の日、ほくは学校があったので、病院にはむかえに行きませんでした。学校から帰ると、急いでおじいちゃんの家に行きました。ネネはまだ少し元気がなかったけれど、ほくを見るとしつぽをくるくるとふって、ほくの顔をぺろぺろとなめてくれました。チョコも、ネネが帰ってきてうれしそうでした。ネネの病気はまた悪くなることがあるそうなので、これからも病院に通ったり薬をずっと飲んだりしなければいけません。とてもかわいそうです。だから会えるときは、ずっと頭をなでてあげています。それがネネのためにほくがしてあげられることだと思っからです。

「やっぱりみんないっしょがいいな。これからもずっと、ずっといっしょにいようね。チョコとネネ。」

※ 良輝さんのチョコとネネへのあいじょうがよくつたわってきます。ネネのためにできることをしたり、チョコの気持ちを考えたりするやさしい良輝さんに出会えたチョコとネネは、きつと幸せな気持ちでいるでしょう。これからも、大切な家族をささえてあげてくださいね。

(西山 友理)

ふわっふわのパンケーキ

三年四組 鈴木 ひまり

「ひまちゃん、今年も夏休みにキャンプに行くことになったよ。」と、お母さんが言った。わたしは毎年、家族や友だちと行くキャンプをとても楽しみにしていた。キャンプの中でいちばん楽しみなことは、いつもとちがうごはんを食べることだ。

二日目の朝、とても天気がよくて気持ちよかった。朝ごはんはパンケーキを作って食べると決めていた。わたしは、お母さんが作り始めるのをずっと待っていた。

「ひまちゃん、作ってみる。」

お母さんがいきなり言った。いつもなら、やらないと言うけれど、「やってみる。」

とつたえた。わたしは、始めて一人でパンケーキを作ることになった。とてもどきどきしていた。お母さんに、手つだつてと言おうとしたけれど、やっぱり自分一人で行けるかもしれないと思い、自分一人でがんばるぞと決めた。パンケーキの作り方を見て、まず、小麦こ、たまご、牛にゆうを入れて、なめらかになるまでしっかり混ぜた。次に、フライパンにバターを入れて、まぜた生地をおたまですくい、フライパンの上にとろとろと流し入れた。生地がぷつぷつしてきたら、ひっくり返して、やけたらまた返した。小さいころに読んだ絵本、「しるくまちゃんのホットケーキ」を思い出した。すごくいいにおいがしてきて、おなかがグーとなりそうだった。二十まいくらい作った。

「おいしそうだな、早く食べたいな。」

と言いながら、全部の生地がやきあがるのを待っていた。のこり一まいになり、

「みんな、やけたよ。」

と言うと、

「はあい、ありがとう。」

と言って、みんなが食べに来た。

「いただきます。」

と言って食べ始めると、お母さんが、

「ふわっふわですごくおいしい。」

と言ってくれたので、とてもうれしかった。自分も食べてみるとすごくおいしかった。

わたしは、パンケーキにチョコをつけたものと、はちみつをぬったものを食べた。あまくて、おいしくて、幸せな気持ちになった。ふわっふわのパンケーキは、みんなに大人気で、あつという間になくなった。

りょう理は、みんなもよろこんでくれるし、自分も作っていて楽しいし、おいしいものを食べられるから、みんなを幸せにすることができるものだなと思った。

これからも家でりょう理を作って、家族みんなによるこんでもらいたい。もつとりょう理が上手になったら、たくさんの人に自分のりょう理を食べてもらいたい。次のちようせんは、もつとかわいくデコレーションしたパンケーキを作ろうと思う。

※ パンケーキ作りを楽しみながらがんばるひまりさんの様子が目にかんできます。これから多くのりょう理を作って、家族や友だちをよろこばせてあげてくださいね。

(原田 涼華)

努力した自分

四年一組 川北 陽太

「オーディションを来週やるからね。」

と、先生がみんなの前でとつ然、大きな声で言いました。ぼくは、ダンスをほ育園の秋から習っています。初めてオーディションがあると聞いたときは、びっくりしました。合かくすれば、中級クラスに上がることができ、よりレベルの高いダンスを教えてもらうことができませす。オーディションの日は、一週間後です。合かくしたい気持ちはあるけれど、練習はめんどうくさいし、これまでダンスをおどれなかったことはないから、特別に練習なんてやらなくてもいいやと思つて、一週間友達と外で遊んだり、ゲームをしたりして全く練習をしませんでした。

オーディション当日、まずは先生からふりつけの発表があり、何回か練習をしました。初めておどるふりつけもありましたが、練習の時は完ぺきにおどれていたから、本番もだいじょうぶだと思つていました。先生から、

「一番におどりたい人は手を挙げて。」

と言われました。ぼくは真つ先に手を挙げました。なぜなら、かん単におどれると思つていたからです。手を挙げている子は他にだれもいなくて、一番におどることが決まりました。みんなの順番も決まり、オーディションがスタートしました。一番のぼくがみんなと先生の前に立って、大きな音楽が鳴り始めました。そうしたら、頭が急に真つ白になって、ふりつけがとんだり、体が固まったりして、さつきまで

完ぺきにおどれていたダンスが、思うように全然おどれなくなってしまいました。こんなにきんちょうしたのは初めてでした。おどれなかったことがくやくしくて、一週間練習もせずにごした自分に、はらが立ってきました。やってみたいと思つて始めたダンスなのに、てき当に考えるようになってしまつていたことに気づきました。ぼくの次の人がよばれ、オーディションが進んでいきます。みんなもぼくと同じようにすぐきんちょうしていて、いつも通りのダンスができなかつたとかやしがつていました。全員のダンスが終わつて、先生から話がありました。

「今回のオーディションはみんなほろほろで、いつものおどりができていなかったの、特別に来週もう一度、オーディションを行います。しっかりと練習をしておくことと、当日は今日のふりつけとあと少し足しておどります。」

と、先生が言いました。ぼくはその話を聞いて、次はたくさん練習して必ず合かくしてやるという気持ちで家に帰り、早速練習を始めました。この一週間は、すごく大事だと思つたから友達から遊びにきそわれてもことわつて、ゲームもやらずに練習しました。ぜつ対に合かくするために、先生に言われた細かい体の使い方や手の動きを意しきして、毎日朝早く起きて練習をしました。

一週間後のさいオーディションの日、練習をたくさんしてきたぼくは、あまりきんちょうしませんでした。先生と全体練習をして、いよいよオーディションです。

「一番にダンスをおどりたい人は手を挙げて。」

ぼくは今回も手を挙げました。今回は練習してきたからぜつ対にだいじょうぶと思つていました。他にも手を挙げた子がいたので、結局最後におどることになりました。音楽が鳴り、さいオーディションが始

まりました。他の子がおどっている間は、頭の中でふりつけをイメージして待っていました。

いよいよほくの番です。今回はいけると自信をもっていたので、スタート位置に立っても落ち着いていました。そして、音楽が鳴り始めました。前回のように頭が真っ白になることもなく、前回のオーディションのくやしさをぶつけて、自信をもっておどりることができました。自分でも上手におどれたと思い、結果発表が楽しみでした。オーディションが終わり、先生から

「オーディション結果はメールで送るので、待っていてください。」と言われてました。早く結果が知りたくて、それから毎日、お母さんに「結果きてない。」と聞きましました。

ちょうど一週間後、ぼくが学校から帰り、げん関を開けると、「陽太、おかえり。結果きたよ。」

と、お母さんの声が聞こえました。ぼくはげん関から急いでメールを見に行きました。

「川北陽太、合かく。次のレッスンから中級クラスにいつて、これからはがんばってください。」と書いてありました。

「よっしゃあ。」
思わず、大きな声が出たと同時に、なみだが出てきました。お母さんも、

「おめでどう。よくがんばったね。」
といっしょによるこんでくれました。ぼくはうれしくて、なみだが止まりませんでした。練習をがんばってよかったと心から思いました。しかし、これで終わりではありません。これから中級クラスになり、

ダンスのレベルがとて上がります。練習についていけるか心配だけど、オーディションのことを思い出し、毎日の練習をがんばろうと思えました。この気持ちをぜっ対わすれないようにしたいです。

※ オーディションを通して、ダンスが大好きだということをも一度思い出すことができましたね。失敗をくり返さないように努力できたからこそ、合かくできたのだと思います。その様子が陽太さんの気持ちとともに書かれています。これからは、ダンスをがんばってください。
(石原 誠)

ずっと見たかった笑顔

四年二組 鳥山 実愛

わたしには妹がいます。いつも笑顔で元気いっぱいなのは、だれにでもやさしくて、どんなことでも最後まであきらめずに取り組むが当たり前屋さんです。ときどきうるさかったり、すぐにわたしのまねをしたりするから、いやだなと思うこともあります。あまえ上手で、わたしがお母さんやお父さんと話していると、会話に無理やり入ってきたり、だっこしてもらったりします。その時、わたしは少しだけさみしくなります。

きよ年の十一月のことです。朝わたしが起きたら、部屋にはだれもいなくて、家の中がとても静かでした。みんなはもう起きたのかなと思っ一階におりていくと、お母さんがいそがしそうに、したくをしていました。

「あれ、えなとパパは。」

と聞くと、お母さんは元氣のない顔で、

「昨日の夜中、えなが何回もはいちゃって、病院に連れて行ったの。」

今もまだ良くなってなくて、入院することになった。」

と言いました。となりでねていたのに、全然気が付かなくて、とてもびっくりしました。

「今は、パパが付きそっている。ママも着がえを持ってすぐ行かないといけないから、もうすぐばあばが来てくれるよ。実愛ごめんね。

めいわくかけるけど、おる守番たのむね。」

お母さんはそう言うと、ばあばと入れかわりに急いで家を出発して

いきました。

妹はだつ水がひどくて、何かの細きんに感せんしてしまったことが分かりました。心配だけれど、昨日までの妹は元氣だったから、きつとすぐたい院できると思えました。妹が入院している間は、お父さんとお母さんをひとりじめできるかも。そう思うと、少しだけうれしくなりました。

昼ごろ、お父さんが帰ってきました。

「まだ、はき気がひどくて、何も食べられないから、点てきをしてもらっているよ。今は、熱も高くて、ずっとねてるよ。」

わたしが思っていたよりも、妹はずつと大変でした。もうすっかり元氣になって、病院でいつもみたいにさわいであると思ったのに。ベッドの上で、ぐったりしている妹の様子を想せうすると、さつきまでの楽しみな気持ちがなくなつて、急に心配になりました。

「だいじょうぶかな。ずっと帰つてこれなかつたらどうしよう。」

心配していると、お父さんが、

「だいじょうぶだよ。熱が下がって、自分でごはんが食べられるようになったら帰れるからね。お母さんとお父さんが交代で付きそいをしないといけないから、実愛も自分のできることを手伝ってくれると助かるな。」

とはげましてくれました。本当なら、出かける楽しい週末になるはずだったから残念だったけど、せんたく物たたみやおふるそうじ、夕ご飯の手伝いなど、自分にできることをさがしてやりました。

その日の夜、帰ってきたお母さんが言いました。

「朝よりも熱が少し下がって、ベッドの上で、起き上がれるようになったよ。実愛に会いたがつた。実愛も助けてくれて本当にありがとうね。大変な休みになつちやつたけど、家族で助け合つて乗りこ

えようね。」

「わたしも早く会いたいな。次は妹がよろこんでくれることをしよう。」
ねる前にずっと考えました。

「実愛、今日ね、学校でね・・・。」

妹は、いつもふとんに入ってもなかなか寝なくて、ずっと話しかけてきます。早くねたい時は、妹がいつまでも話しかけてくるのがいやでした。でも、今日はとても静かなのに、なかなか寝むることができなくて、妹のことばかり考えてしまいました。妹はねぞうが悪くて、よく夜中にけられます。いつもはいいかげんにしてほしいと思うけれど、今夜はそれもあります。いつもよりぐっすりねむれたはずなのに、朝起きた時には、とてもさみしくなりました。やっぱり二人がいたいと思いました。

次の日、妹が早く元気になれるようにと願いをこめて、千羽づるを作ることにしました。しかし、千羽は折れないので、十羽。心をこめて折って、糸でつなげたつるを、お母さんが病院にとどけてくれました。交代でお父さんが病院から帰ってきました。そして、妹の写真を見せてくれました。少しやせてしまった妹が十羽のつるを持って、笑っていました。まだ、いつもの笑顔ではなかったけれど、妹の顔を見ることができて、安心しました。早く元気になって、たい院できるといいなど、心から思いました。十羽づるの願いがとどいたのか、妹は、その日の夜から少しずつ食べることができるようになり、元気も出てきました。

入院してから四日目の朝。

「えなちゃん、今日けんさをして、結果が良ければたい院できるかもしれないって。」

と、ばあばが教えてくれました。その日は、学校でも一日中妹のこと

を考えていたので、落ち着きませんでした。みんなと別れた後、大急ぎで走って帰ると、庭にお母さんの車が止まっているのが見えました。けん関のチャイムをおすと、

「実愛、おかえり。」

と元気な声がありました。入院する前と同じ、わたしが、ずっと見たかった笑顔の妹でした。

「えな、おかえり。よかったね。」

そういうと、妹はうれしそうに、

「千羽づるありがとう。元気になったよ。」

とだきついてきました。無事に帰ってきてくれてよかった。妹の笑顔がまた見ることができて、本当に良かったと心から思いました。

「実愛、心配かけてごめんね。ありがとう。」

お母さんの一言で、つかれがふき飛びました。

みんなで力を合わせて乗り越えたことで、家族のきずなが深まりました。楽しいはずだった四連休が、妹の入院で大変な四連休になってしまったけれど、大切なことが分かりました。それは、家族みんなが健康に生活できる毎日が、とても幸せだということ。それから、妹はわたしにとって世界中でたった一人だけの大変な妹だということです。けんかもするけど、妹のことがわたしはこれからも大好きです。

※ 毎日となりにいる妹がとつ然いなくなり、不安になりながらも自分のできることをせいっぱいに取り組もうとする実愛さんの気持ちがよく伝わってきました。これからも妹といっしょに仲良いたくさんのけい験をしてください。
(木内 愛弓)

やってみなくちゃわからない!

四年三組 鳥居 鈴奈

わたしは小学生になって四年間、いろいろなことにチャレンジしてきました。一番初めは、一年生の四月に学級代表に立こうほしたことです。小学生になったばかりで、周りは知らない子が多くて不安でしたが、新しいことをやってみたい気持ちになり、立こうほしました。立こうほした人は、みんなの前でどんなことをがんばりたいか、どんなクラスにしたいか、自分の考えをスピーチしなければならなくて、家に帰ってからノートにスピーチを書いて、お姉ちゃんやお母さんの前で何回も練習しました。お姉ちゃんに、

「早口になっているから、もっとゆっくり話さないよ。」
「もっと大きな声でいいねいに。」

とアドバイスをもらいました。がんばってやっているのに、ちゃんと言われた通りにやっているのとイライラすると同時に、このままでいいじょうぶかなと急に不安になり、なみだが出てきました。やっぱりやらなければよかったとも思いました。でも、二十回目くらいの練習でお姉ちゃんたちが、

「今の話し方、良かったよ。」
「気持ちがおもっていたよ。」

と言ってくれて、あきらめずにみんなの前でスピーチをしようと思えました。

スピーチの日は、なんだか落ち着かなくて、早く家に帰りたくなりました。そして、係決めの時間になり、先生がわたしの名前をよび、

みんなの前に立ちました。とてもきんちようして、手がふるえました。しかし、話し始めると家で何回も練習したおかげで、とちゅうで止まったりつかえたりしないで、最後まで練習通りに話すことができました。スピーチが終わって、自分の席にもどると、思ったより上手く話せてうれしい気持ちでいっぱいになりました。みんなのスピーチが終わり、学級代表に決まった子の名前を先生がよぶ時がきました。どきどきしながら待っていると、自分の名前がよばれました。信じられない気持ちでいっぱいでした。スピーチの練習の時は、あれほどやらなければよかったと思ったけれど、やっぱりやってよかったと思いました。

学級代表になってからは、楽しいことがたくさんありました。けれど、クラスの友達に注意をしたり、指示をしたりしなければいけない時もありました。わたしは、人に注意することが苦手で、どうやって話せば、みんなに伝わるか考えすぎて何も言えなくなってしまいました。そんなことが何回もあり、やっぱり学級代表をやらなければよかったと思っていると、クラスの仲良しの友達が、

「鈴奈ちゃん、学級代表なんだから先生みたいに静かにしてくださいよ。」
「静かにしてくださいよ。」

とアドバイスをくれました。そこで、勇気を出して大きな声でと声をかけると、みんなが静かに話を聞くしせいになってくれました。勇気を出してよかったと思いました。

一年生でのこのけい験を通して、わたしはやってみることの大変さ以上に楽しさを知りました。だから、二年生以こうも学級代表に立こうほしたり、全校の前で代表児童のスピーチをしたり、指き者のオーデイションにチャレンジしたりしました。新しいことは、大変だった

り、ときどきいやな思いをしたりすることもあるかもしれないけれど、自分でやってみようと思っただけで行動すると、楽しいことやうれしいこと、わくわくすることがあって、やってみる前の自分よりも、やってみた後の自分の方が好きになれることを学びました。これからもわたしは、やってみなくちゃわからないと思いつつ、新しいことにチャレンジしたいです。

※ 一年生のけい験からちよう戦をずっと続けている鈴奈さんがとてもすてきです。これからもたくさんのちよう戦をして、様々なことをぎゆうしゆうして成長していつてくださいな。

(加藤 由似)

わたしのおんがえし

四年四組 鈴木 みわ

わたしのおじいちゃんは、家から車で三十分くらいの所で、おばさんの家族といっしょに住んでいる。いつも元気で、やさしいおじいちゃんは、地いきのお年よりの家をほう問するボランティアをしていた。おじいちゃんは、ときどきおばあちゃんの庭で育てた野菜や果物をとどけに家に来て、お母さんと話をし、わたしとお兄ちゃんに、「百円玉がたまりすぎちゃって重いから、もらって。」
と言って、お小づかいを置いていって来ていた。

おじいちゃんは、いつもわたしたちのことを気づかってくれていて、台風や地しんがあると必ずと言っていいほど電話をくれる。三月十三日の朝八時三十分ごろに地しんがあった。この日は、土曜日でゆっくりねていて、地しんで目が覚めた。しん度二だったが、二階にいたせいか、ゆれて少しこわかった。地しんはすぐおさまり、起きて出かけるしたくをしていた時に、おじいちゃんの家から電話が来て、お母さんは、

「また、おじいちゃんが心配して、電話してきたのかもね。」

と笑って電話に出た。でも、お母さんの様子がいつもとちがった。

「すぐに行くね。病院が決まったら連らくして。」
と心配そうな顔に変わって、電話を切るとあわててしたくをし始めた。電話は、いとこのしんくんからだった。おじいちゃんが、たおれてきゆう急車をよぶことになったから、お母さんにもすぐに来てほしいという内ようだった。その日のお出かけにお母さんは行けなくなり、わ

たしは友達の家で待たせてもらうことになったが、お母さんがあわてていたので、わたしも心配で仕方がなかった。

夕方には、お母さんが帰ってきていて、おじいちゃんは頭の病気になるって動けなくなってしまうかもしれないと教えてもらった。三日前にも家に来てくれたおじいちゃんが動けなくなるなんて、信じられない。わたしは想ぞうもできず、少しふざけて、

「えっ、もうおじいちゃんからお小づかいもらえないってこと。」
と言ったら、お母さんが半分泣きながら、すごいいきおいでおこってきた。そのいきおいで、ことの重大さに気づいた。

病院には小学生は入れないという決まりがあり、家族の中でわたしだけ会いに行くことが出来なかった。お母さんはしばらく毎日のように病院に通い、おじいちゃんの様子を教えてくれた。もうこうそくという病気になるたおじいちゃんは、動くことも話すこともなく、何日もねていた。それでも、お母さんは病院に行き、おじいちゃんの顔ふきやみぎき、ひげそりなどをしながら声をかけて、手や足のマッサージをしていると言っていた。

おじいちゃんは病気になるって一週間ぐらいたったころから少しずつ声を出すようになったが、言いたいことが言えずにすぐにあきらめてしまい、毎日悲しそうにしていると教えてもらった。でもお母さんやおばさんが、おじいちゃんに会えない人のために動画をとってきた。そこにうつっていたのは、わたしの知っているおじいちゃんではなかった。ただベッドでねているだけのおじいちゃんだった。ある日、お母さんのけいたい電話がなった。

「おじいちゃんからだ。」

と、お母さんがうれしそうに電話に出た。残念ながら、おじいちゃんの言いたいことは分からなかったが、おじいちゃんがかた手で電話を

することができたことに、わたしたち家族はとつてもうれしくなった。お母さんもはずむ声で、

「今から病院に行くつもりだったから、あとからゆっくり聞くからね。」
とうれしそうに電話を切って出かけていった。それから少しずつりハビリが始まり、立ったりすわったりする訓練の動画をとつて、見せてもらった。

しばらくたつて、わたしも面会ができるようになった。今まで会えなかったので会えるのはうれしかった。動画では見せてもらっていたが、実際に会うと、今までのおじいちゃんとはちがうことに戸まどい、わたしは固まってしまった。どうやって話しかけたらいいのかも分からなかった。

おじいちゃんが病気になつてもうすぐ四か月。とつてもひどいろうこうそくだったとお母さんから聞いた。お医者さんに手じゅつをしてもらい、毎日三時間ほど、体を動かしたり、話したりする訓練をがんばっている。その訓練でおじいちゃんの体は少しずつ動くようになって、今はつえで歩けるようになった。ときどき電話もしてくれる。あと一か月で、おじいちゃんはい院の予定だ。

いつもみんなのことを気づかなくて助けてくれていたやさしいおじいちゃんが、今は自分のことがやれなくてこまっている。それでもおじいちゃんは、わたしたち家族のことを心配してくれている。八月八日に宮崎県でしん度六の地しんが発生した後も、おじいちゃんから電話があった。話しくそうだったが、また地しんがあるかもしれないので、地しんにそなえるように教えてくれた。

今、わたしにできることは、おじいちゃんの話をやつくり聞き、おじいちゃんの期待にこたえることだと思う。いろんなことにチャレンジし、がんばったことをほしくしたい。おじいちゃんの家に行けな

いときは、ビデオ通話などを活用していこうと思う。これまで以上に、話す機会を作り、おじいちゃんが話すことをきらわず、会話を楽しめるようにしたい。

※ いつもみわさんのことを気にかけて、助けてくれるやさしいおじいちゃん。そんなおじいちゃんのために、これからは、みわさんができることを続けて、おじいちゃんとの会話をたくさん楽しんでください
ね。
(黒野 淳美)

お米のやさしい神様たち

五年一組 伊藤 小陽

「一つぶのお米には、三人の神様が入っているんだって。おおばが言っていたよ。」

おおばは、お母さんのおばあちゃん。わたしのひいおばあちゃんだ。夏休みのある日、じいじの家からの帰り道だった。パチパチ、ザーザー。車の中で何か音がしている。パチパチ、シャー。何の音かな。信号が赤になってふり返ってみると、車の後ろの席に立ってあったお米のふくろが、横になっている。じいじが育てたお米だ。お米がこぼれている。たくさんこぼれている。お米のふくろが破れてしまっていた。家に着いて見ると、シートベルトを差しこむ場所にもお米が入っていた。はあ、すき間に入っちゃった。席の下にもたくさんこぼれている。どうやって拾おう、拾えるのかな。

「全部拾おう。」
と、お母さんが言った。すぐく多いのに。何時間かかるのだろうと思いつながり始めた。お母さんが、家の中からスプーンとへらと入れ物を持って来た。席の下のすき間にスプーンを入れて、入れ物で受けた。スプーンを動かすと、お米がぞろぞろ出てきた。ああ、気持ちいい。だんだん楽しくなってきた。これで終わったと思っても、まだまだ出てくる。わたしは、ていねいに拾った。

「このお米はじいじが時間をかけて、一生けん命作ってくれているお米だよ。これは命だよ。」

と、お母さんが言った。まだまだ出てくる。拾っている時に、お米の神様の話を聞いた。お米には神様がいて本当かな。わたしは、拾うのをあきらめなかった。最後の一つぶまで拾おう。このお米は、みんなの体になる大事なものだから。最後まで拾わないとお米がかわいそう。お米を作ってくれたじいじが悲しむよね。だけど、だんだんつかれてきた。いつまで拾うのだろう。まだ終わらない。

「わたしたち、お米の神様を助けているみたいだね。小陽、ありがとう。」

と、お母さんが神様の声の真似をして言った。お母さんは、何を言っているのだろう。最初はそう思っていたけれど、拾っているうちに、だんだんとお米の神様を助けている気持ちになってきた。やっと終わりが近づいてきた。最後の一つぶまで拾った。全部拾い終わって時計を見ると、一時間経っていた。計量カップで量ってみると、二合と半分もあった。

わたしは、お米の神様のことを考えてみた。きっと三人ともやさしい神様だろう。体を強くする神様と、血になる神様と、元気になる神様だろうな。いつも食べているお米は、とてもおいしい。おなか为空いたときに、お米があるとうれしい。運動してつかれた後に食べたい。お米一つぶに三人いるなら、おなかの中に入ったら何人いるのだろう。おにぎり一つで二万人ぐらいかな。

お母さんが、おにぎりを作ってくれた。こんぶが入っているおにぎりだった。神様がいて知って、いつもよりおいしく感じた。おにぎりは温かいな。体が温かくなってきた。ほわんとする。気持ちがいいな。うれしいな。楽しいな。一つぶのお米がわたしたちの体になる。こぼれたお米も大事に拾っておいしく食べたら、じいじはうれしい気持ちになるのだろうな。じいじもばあばも、わたしたちのためにがんばる。

ばっててくれるのだ。

おぼんにじいじに会った時、

「お米の神様は、いると思う。」

と聞いてみた。じいじは、ゆっくり話してくれた。

「いるだろうなあ。どんな神様かねえ。いい具合に温かくて、いい具合に雨がふって、いねかりのときにはしっかりとかわいて、作業がしやすくなる神様。」

と、じいじが言った。

日の光、雨、土、空気、風という自然全てで、じいじを見守ってくれている神様。わたしが考えた神様とはちがうな。じいじと自然が協力し合っているのだね。

いねかりは十月の初めで、もうじきほが出るから、水を増やすそう。だ。じいじは、毎日田んぼを見に行っている。暑い中やっているから、すぐくあせが出そうだな。こんなにがんばっているから、たくさんいいお米になるといいな。じいじ、ばあば、ありがとう。お米のやさしい神様たち、ありがとう。

※ お米がこぼれたことをきっかけに、お米の神様について考える機会ができましたね。小陽さんが、給食でお米を残さず食べるすがたやいねかりで丁寧に作業したすがたは、家族やお米の神様に喜んでもらえていると思います。

(渡邊 航成)

わたしの弟

五年二組 藤田 直花

「かなめなんて大きらい。」
と、わたしは弟に言った。

弟は、わたしが二才のときに産まれた。産まれるとき、お母さんは、わたしがまだ小さかったので心配させないように、となりのおばあちゃんの家で、わたしをねかしつけてから病院へ行った。

お母さんは、お父さんと一年生だったお姉ちゃんだけ病院に連れて行った。

わたしは、おばあちゃんの家で目をさまし、ひとばん中、
「ママー。」
と泣いていたそうだ。

そのときのわたしは、お母さんがいなくてさみしかったのもあったが、お姉ちゃんだけ連れて行ったことが、悲しくてくやしかった。

次の日、病院に行ったら、そこには小さな赤ちゃんがいた。ひぎにのせてもらうと、小さな手でわたしの指をにぎってきた。とてもかわいかった。赤ちゃんのときの弟は、よくねて、にこにこ笑う大人しい赤ちゃんだった。おじぞうさんみたいと、わたしは思った。弟はかわいかったけれど、そのときのわたしは、お母さんを取られてしまった気がしていた。お出かけのときも、

「かなめだけずるい。」
と、弟が乗っているベビーカーに無理矢理乗ってしまったこともあった。今までは、わたしが家族の中でいちばん小さくて何をしてもおこ

られなかったのに、急に、

「お姉ちゃんだからしっかりしてね。」

とお母さんから言われて、なっとくできなかった。

弟はよく笑っていたけれど、あまり話さなかった。だから家族の中では、大人しくてかわいいと人気だった。

わたしとお姉ちゃんがけんかをしたら、いつも言い合いになる。でも弟は、けんかになっても泣くだけで言い返してこない。

「弟を泣かしちゃダメでしょ。」

と、お母さんはわたしに言っておこってくる。言いたいことがあったら、言えばいいのにと、わたしはいつもそう思っていた。

そんな弟が保育園の年長になって、急に小さなことでおこるようになった。弟は年中のころから話し始めていたけれど、まだ言いたいことが上手に話せなかった。保育園でも、友達や先生に思うように話せていないようだった。

「あのね、あのね。」

と、弟がわたしに言った。弟が話し始めるときはいつも、あのねから始まる。一生けん命聞いても、何を言いたいかよく分からないときがある。わたしはいらいらしてしまった。

「ちゃんと話してよ。」

と、わたしが弟に言うと、弟もおこってけんかになってしまう。お母さんに相談すると、

「かなめが産まれたときから、ずっとなおちゃんはかなめが大好きだったよ。かなめは、はいはいも、歩くのもおそかったね。でも、みんなでいっしょに練習してできるようになったよね。話すのも上手になるまでみんなでいっしょにがんばろう。」

と、お母さんはわたしに言った。家族みんなが話しかけて、弟がおこ

つているときには、おこっている理由を考えたり、何がいやなのかを弟に聞いて確かめたりした。そうすると、少しづつ弟も思っていることを話せるようになり、二年生のころには、家で弟とけんかすることが少なくなった。

弟は、わたしが転んだりぶつかったりしてけがをすると、

「なおちゃん、だいじょうぶ。」

といつも心配してくれる。わたしがかぜを引いて熱が出てつらそうにしていると、薬を持ってきてくれる。それに、弟がたん生目プレゼントにもらったぬいぐるみを、わたしがうらやましがっているとき、

「なおちゃんにも一こあげる。」

とわたしにくれたこともあった。

今では、お母さんがいそがしそうに家事をしていると、

「何か手伝おうか。」

と、弟は料理の手伝いをしたり、せんとく物をたんだりしている。弟がすすんで自分ができるお手伝いをしているのを見ると、なんだかたのもしくなる。そして、わたしも弟に負けないでお手伝いしようという気持ちになる。

今でも、お姉さんあつかいされていやになったり、いらいらしてけんかになったりしてしまうこともあるけれど、気が付くと、いつもいっしょに遊んでいる弟。わたしは、人見知りしてしまうタイプだけど、弟はみんなと気軽に話せるから、だれとでもすぐに仲良くなれる。それにうら表がなくて、だれにでもやさしい。勉強は好きではないけれど、家で一生けん命がんばっている弟を見ると、わたしも応えんしたくなる。

弟が産まれたときのぶにぶにのほっぺたは、今もぶにぶにでついさわってしまふ。弟が笑顔になると、家族みんなが笑顔になる。けんか

してもやっぱりかわいい弟。これからもよろしくね。

※ お姉さんとして、がまんが必要な場面もあると思いますが、やっぱりかわいい弟という文から、お姉さんとして温かく広い心をもって接していることが伝わってきました。これからも弟といっしょに笑顔ですてきな関係を築いていってくださいね。

(三浦 千鶴)

こえたいかべ

五年三組 酒井 夏花

わたしには、こえたいかべがあります。それは、母です。わたしが住んでいる市には、一年に一度、競書会という書道のコンクールがあります。わたしの母は、小学一年生から書道を習っていたため、書道は得意分野です。競書会では毎年入賞し、四年生のときには教育委員会賞を取ったと聞きました。

わたしが一年生のとき、初めての競書会の練習が始まりました。母から授業のノートやプリントの字をていねいに書くように言われていたわたしは、競書会の字もていねいに書きました。すると、こん談会で、

「夏花さん、とても字が上手ですね。競書会、期待しています。」とたん任の先生から言われました。その言葉で母のスイッチが入ってしまいました。競書会本番は一月だったので、冬休みにたくさん練習しました。精いっぱい書いても、母にチェックしてもらおうと赤色えん筆で直されてやり直し。もう一度がんばって書いても、また直され、また書いてのくり返し。母に言われたように書くことができなくて、くやしくて泣けてしまうこともありました。けれど、家族や先生に喜んでほしくて、あきらめずに母のきびしい練習をがんばりました。

競書会当日、わたしはきんちょうして手がふるえていたけれど、練習でやったことを思い出して一つ一つの字をていねいに書きました。結果は、入賞でした。結果を聞いたとき、とてもうれしかったです。家に帰って一番に母に結果を伝えました。母はとても喜んでくれました

た。練習はつらかったけれど、あきらめずにがんばってよかったと思いました。そして、来年も入賞したいと思いました。

二年生の競書会では、母の特訓がさらにきびしくなりました。一生けん命練習しているのに、母からだめ出しされると、とてもはらが立っていらしたけれど、競書会で入賞するために必死に練習しました。そのおかげで、二年生の競書会でも入賞することができました。二年連続で入賞できたわたしは少し自信がつき、小学校六年間競書会で入賞するという目標を立てました。しかし、三年生からは毛筆になります。すると、

「毛筆はやっぱり書道を習っている子が強い。わたしとの自主練習だけでは入賞はむずかしい。」

母が言いました。それを聞いたわたしは、本気で入賞したかったので、書道教室に通うことにしました。

習ってみると毛筆はむずかしく、これは三年連続の入賞はきびしいかもしれないと不安になりました。でも、せっかく書道教室に通わせてもらったのだから、少しでも上手になろうと努力しました。冬休みには、家でも競書会の練習をしました。でも、家で練習すると、母がいろいろとアドバイスしてきます。最初は、素直に聞いて書こうと努力しましたが、なかなか思うように書けませんでした。

「まだ習って数か月だからね。わたしは、九年間書道教室に通っているからまだまだわたしの方が上手だな。」

と、母が笑って言うので、わたしはいらいらして文句を言い、けんかになってしまいました。母が近くにいるとうるさいので、母を部屋から追い出して、一人で泣きながら練習したこともありました。そのおかげか、全く自信のなかった初めての毛筆の競書会も、入賞することができました。母に伝えると、母も入賞できないと思っていたので、

とてもおどろいていました。

四年生の競書会、わたしにとって大きな問題が発生しました。これまでの競書会は一月でした。しかし、この年は十二月に行われることになったのです。わたしは、これまで冬休みを利用して練習してきました。でも、これでは冬休みに練習できません。これはまずいと考えりました。宿題や習い事があるなかで、休日はもちろん、平日も、少しでも時間があれば家で練習しました。書道教室にも一年以上通い、毛筆にも慣れ、少し上手に書けるようになったと思いましたが、

「まだまだ下手。これでは教育委員会賞は取れない。」

と母に言われました。わたしは、くやしくて文句を言っ、またけんかになりました。でも、いつもけんかをして、次に練習するときには、アドバイスをくれる母。教育委員会賞を取った先ばいとしての母の言葉や、書道教室の先生の言葉を思い出し、競書会本番、きんちょうしたけれど、一生けん命練習した自分を信じて、落ち着いて書きました。結果が出るのは一月なので、冬休みの間、とても気になっていました。冬休み明け、いよいよ結果発表のときがやってきました。

「教育委員会賞、酒井夏花さん。」

と、たん任の先生が発表しました。クラスのみんながはく手をしてくれました。わたしは、まさか教育委員会賞が取れるとは思っていなかったのです。とてもびっくりしました。家に帰って母に報告すると、母もとてもびっくりしていました。

「おめでとう。よくがんばったね。これで、わたしにならんだね。」と、母が言い、初めてわたしの字をみとめてくれました。

わたしはつらいときもあつたけれど、あきらめず目標に向かって努力したら、競書会で母とならぶことができました。次の目標は、競書会で母をこえることです。わたしには、競書会で賞を取るチャンスが

あります。母をこえるために、わたしはもう一回教育委員会賞を取るか、その上の賞である市長賞を取ることを目指します。そして、母を見返します。母のかべは高いけれど、努力は必ずむくわれると信じ、わたしは競書会で母のかべをこえてみせます。

※ 「こえたいかべ」を乗り越えるために、夏花さんが努力している内面の様子がうまく表現されています。今年の競書会もがんばって。お母さんをこえられるのをおうえんします。(稲垣 康弘)

あきらめなければできろ

五年四組 藤井 晴都

ぼくは、水泳を習っていて、今は平泳ぎのクラスだ。今までクロールとせ泳ぎをやってきたけれど、平泳ぎは苦戦している。クロールとせ泳ぎは一回か二回で合格できたけれど、平泳ぎは二回連続で落ちてしまった。ある日、お母さんが、

「次は受かるんだぞ。」

とほくに言っつ、プレッシャーをかけてきた。そして、ぼくは受かるためにがんばらなきゃと思つた。テスト前の最後の練習があつたけれど、速く泳げている感じが全くしない。どうしよう。このままだと合格できない。ぼくはそう思つた。

テストの日の午前中に、お父さんとお兄ちゃんと近くのプールに練習に行つた。ぼくは、最初に二十五メートルのタイムを計つた。どんなタイムか考えながら、二十五メートルを泳ぎ切つた。結果は、四十五秒だつた。テストの合格タイムは三十五秒だ。ぼくのタイムは十秒もおそい。手のかきや足のけり、それから、けのびのこつをお父さんに聞いてみた。

「手のかきはもうちよつと速くして、足のけりは強くして、けのびはもうちよつとのびて。」

と、父はほくに言つた。お父さんに言われたことに気を付けて必死に練習した。再び二十五メートルを泳ぎ、自信満々に歩いてお父さんのところへ向かつた。タイムを聞くと、

「四十五秒。」

と父に言われ、ぼくは希望をなくしてしまつた。またさつきと同じタイムだ。全く合格できる気がしなかつた。ぼくは、落ちこみながら家に帰つた。どうしても合格したい。どうしたら速く泳げるかインターネットで調べた。いい動画がないか調べたら、分かりやすい動画があつた。その動画は、もぐつたらすぐ体を反らして息つきをするというものだつた。ぼくは、その動画を見て真似してみようと思つた。

とうとうテストのときがやつてきた。テストの前に練習があつた。練習のときに以前見た動画で言つていたことを真似してみたら、前よりも速くなつていて感じがした。そのおかげで、もしかしたら合格できるかもしれない、と思い始めた。

いよいよテスト本番の時間が来た。ぼくは、待っている間とてもきん張つていた。ぼくの番が来てしまつた。水に入るといつもより水が冷たく感じ、鳥はだか止まらなかつた。スタートと同時にかべをけつた。泳ぎながら、いつもより速いじゃん、合格できるかもしれない。ぼくはそう思い、手で必死に水をかいて、足も力強くけつて、けのびも長くのびて、ゴールまで泳ぎ続けた。そしてゴールに着いた。どきどきしながら先生のいる場所に歩いていった。

どきどきの合格発表のときがきた。先生から、
「晴都くんのタイムは、三十四秒。ということは。」
と言われた。

「え。合格してる。」

とぼくはおどろきながら言つた。

「そう、合格だよ。おめでとう。」
と、先生に言われてうれしかつた。でもうれしさよりも、やつとバタフライかという気持ちの方が強く、あまり喜べない。

車の中でお母さんに合格したことを伝えた。お母さんは、

「おめでどう。良かったね。」

と言ってくれた。とてもうれしかった。家に帰って、早くお父さんとお兄ちゃんにも伝えたくて仕方がなかった。いっしょに練習してくれたお父さんには、特に早く伝えなかった。家にとり着した。

「ただいま。お父さん、テスト合格したよ。」

と伝えた。お父さんは、

「え、本当に。おめでどう。」

と言つて、喜んでくれた。ぼくはうれしかった。家族みんながぼくのことをほめてくれた。

ぼくは、今回の水泳のテストを終えて、あきらめなければできるということを学んだ。これからも、いろいろなことにちょう戦してできることを増やしていきたい。

※ 「あきらめなければできるとことを実せんを通して学んだことが分かりました。できるようになるまで、お父さんに聞いたり、インターネットで調べたりする晴都さんはすてきです。これからも、いろいろなことにちょう戦してできることをどんどん増やしていつてください。」

(中村 桃奈)

いきいきばあば

六年一組 小柳津 あかり

私のばあばの家のげん関には、かごがあり、点字のあいうえお表が何枚も入っています。あいうえお表は、家族や知り合い、看護師さんや、かいご士さんの名前を書いためいしのようなもの、あいさつをするときに使うもの、いろいろな点字表が入っています。母が点字用のシールに言葉を打ち、それを厚紙にはったそうです。ばあばがだれかとコミュニケーションをとるのに使います。会いに来た人はまず点字表を手に取り、ばあばの指をこんにちはのところにかかします。そうすると、ばあばは、

「はい、こんにちは。」
と言います。

ばあばは、赤ちゃんのころから目が見えません。高熱が出る病気になってしまい、見えなくなったからだそうです。しかし、ご飯を作り、そうじをして、洗たくもして、だれかにやってもらわなくても、一人で何でもできていました。ところが、二年前に耳がほとんど聞こえなくなっていました。足をけがして、三か月入院している間にどんな耳が遠くなってしまったのです。病院の先生には、

「手術をして、リハビリをしてもよくて歩行器、悪くて車いすでしょう。」

と言われたそうです。しかし、今、ばあばは、すたすた歩いて、散歩に出かけています。目が見えなくても、耳が聞こえなくても、外に出かけたくてしょうがないのです。美容院、服屋さん、キリスト教の教

会などに出かけていて、散歩も一日一回行っているのに、

「私、家に閉じこもっているんだけど。」

と文句を言っています。母は、ばあばの家に様子を見に行き、

「行ったのに居なかったんだけど。」

とぶんぶんしています。

ばあばは、お花を育てるのが好きです。なえを買ってきて、自分でプランターや鉢に植えています。

「あなた、ちよっと元気ないね。」

「あんたさいたの。」

とお花に話しかけています。お花は、目が見えなくても香りや花びらの手ざわりを楽しめるのがよいそうです。私の母もお花に話しかけているので、植物に愛情をもって育てていて、とても素敵な親子だなと思いました。ぬいぐるみも、さわって楽しめるのでたくさんあります。

ばあばは、

「私、小鳥飼いたいんだよね。」

「私、犬飼いたいんだよね。」

としょっちゅう言っていたけれど、母が、

「さすがに何かあったら生き物がかわいそうだからやめて。」

と止めています。耳が聞こえなくても、目が見えなくても、ばあばのやりたいことはつきません。母は、次は何を言い出すのかとはらはらしています。

最近、私はあまりばあばの家に行っていませんでした。夏休みに入り、何日かばあばに会いに行きました。何か月か会っていなかったけど、顔のはだがつやつやしていて、かみの毛もきれいにしてありました。母は、

「私と同じ化粧しよう品使っているんだけどなあ。なんで。」

と言っています。母は、最近しわが増えてきたそうです。

ばあばは、今、七十九才です。この前お医者さんに、認知しよりの検査してもらったら、百点だったそうです。

「やっばりね。」

と自信満々のばあば。ばあばの家から帰るとき、私や弟は、ばあばの手をにぎってさよならのあいさつをします。

「あかりちゃん、ばあばのどこ、また来てね。」

と手をぶんぶんしながら、ばあばは言います。私は、

「うん、また来るね。」

と答えました。母は、

「あんた、ばあばにまた来るねって言うとき、とつても優しい顔しているよ。」

と言いました。そうなのかな。これからはもっとたくさんばあばの家に行こうと思いました。

※ 家族のことをしっかりと見ているあかりさんだから書ける作文ですね。いつもみんなのことをよく気にかけているように、おばあさんのことも思いやっているからこそその優しい顔ができると思います。ぜひ、これからも家族を大切にしてください。

(糟谷 昌輝)

サマースクールで学んだこと

六年二組 河井 琳月

「これ、応ほしておいたから。」

お父さんがいきなり紙を見せて言ってきた。それは夏休みにある愛知県弁護士会主さいのサマースクールの案内だった。ぼくはその紙を見たときはあまり行きたくなかったけれど、弁護士という仕事があるもので何を話すのか少し知りたかったので行ってみることにした。

八月八日、会場の名古屋へ電車で行った。受付をしたら一班だと教えてもらった。会場にはたくさんの方がいておどろいた。一班の人数は、自分をふくめて七人。初めにぶ台で「アリとキリギリス」の劇が始まった。ぼくも小さいときに読んだことがある話だったので、なぜこの劇をやるのかが不思議だった。夏にアリの忠告を聞かないで遊んで暮らしていたキリギリスが冬にやってきて、食料を分けてほしいと言いに来たところまではいっしょだったが、そのあと、ぼくが読んだ話ではアリはキリギリスに食料を分けてあげていたが、今回の劇は少しちがいで、キリギリスに食料をあげるのか、どのくらいあげるのか、自分たちの分はどのくらいなのかなどたくさん問題をアリたちが話し合うことになった。女王アリや兵隊アリや働きアリや老人アリや病气アリ、みんながばらばらの意見だったので、どうしたら一つにまとまるか一班のみんなで話し合った。

その中で一番心に残ったのは、アリの食料の分配を考えるとという問題だった。働きアリや女王アリ、兵隊アリや老人アリは五枚のパンをもらえるのに、病气のアリは一枚しかももらえないことを多数決で決め

てしまったことをぼくは不平等だと感じた。病气のアリも同じアリなのに、働いていないという理由で食料が少ないのはおかしいと感じた。しかし、多数決で決まったことなのだから、しかたがないという意見もあった。はたして多数決で全てを決めてもいいだろうか。

ぼくは六年生で学級代表になった。クラスの意見を聞くときは多数決で決めることが多い。五年生のとき、クラスのレクリエーションで何をやるか考えた。そのときは、ほとんどの子が外で遊ぶことをしたいと言っていたが、何人かは教室で遊びたいと言っていた。結局多数決でおにごっこになったのだが、今思うと、走るのが苦手な人や調子がよくない人にとっては、楽しいはずのレクリエーションがとてもしらかったのではないかと思う。みんなが楽しめるようにまずは少数の人の意見もしっかり聞き、なぜ外がいやなのか、外で遊ぶなら何がいかを聞き、困ってしまう人がいないように言っておけばよかった。

ぼくがサマースクールで学んだことは、みんな意見を出し合い、みんな決めていこうとする社会を民主主義といい、日本は民主主義国家であるということ、国会でも多数決で法律を決めているということだ。しかし、多数決ばかりだと、少数の人の人権をしん害するときもあり、その人たちを守るために憲法があるということも学んだ。

サマースクールで学んだことはこれからの学校生活にも生かせるのではないかと感じた。大勢の意見ばかりではなく、少ない人数の子の意見にも耳をかたむけていかないといけない。みんなが楽しく平等に暮らしていくのは難しいことかもしれないけれど、まずはみんなの意見を聞くことが大切なのではないかと感じた。

※ 全ての人が平等に暮らし、だれもつらい思いをしない世の中というのは難しいですね。しかし、苦しい思いをしていたり、我ま

んしてくれたりしている人たちを横目に生きていくことも、また
ちがいます。この経験を、今後の学校生活、そして人生に生かし
ていってください。

(大輪 賢哉)

最初で最後のキャッチ杯

六年三組 市川 真央

ぼくぼく。ぼくぼく。心臓の音が、うるさい。なんだかくらくらしてきた気がする。目を閉じて、ゆっくりと息を吸う。横にずらつと並ぶ人をちらりと見て、

「お願いします。」

と大きな声で言う。私の戦いが始まった。

始まりは、ある日曜日。いつも通り、野球の練習をしていたらチームの代表から声をかけられた。

「キャッチ杯に出てみない。」

そのときの私はどういふものなのか分かっていなかったの、

「あ、はい。やってみます。」

とよく分からないまま言った。そうしたら、いつかの土曜日、指定されたグラウンドに集まると同じチームの二人と、ちがうチームの人がたくさんいた。女子は私だけで、軽くパニックになりかけていたが、とうとう自己しようかいが私の番になった。私はきん張して、とても小さな声で自己しようかいをした。どうやらキャッチ杯というのは、愛知県内の六市で試合をするものらしい。大人がいろいろと説明をしてくれた。そしてまた一週間ほど経ち、写真さつ影があった。ユニフォームを着て、一人一人の写真をとっていくのだ。その後、カメラの前で選ばれたメンバーと共に意気込みを言う。それから、毎週日曜日の三時半から練習をするようになった。カメラを持った人が来ることもあって、自分の姿がテレビに映るかもしれないと思うと、すごくど

きどきして、ぎこちなくなってしまう。練習を重ねるにつれて、今までは苦手な野球だったけど、今までより楽しいなと感じ始めていた。そうしたら家族にも、

「なんか、最近楽しそうだね。」

と言われた。そして、むかえたキャッチ杯の日。私は運動会があつて、最初の試合には出られなかった。西尾チームが負けてしまうと、私は試合に出ることができない。だから運動会中、気が気ではなかった。運動会が終わつて、あわてて行くと、西尾チームのメンバーが

「勝つたよ。」

と報告してくれた。それを聞いたしゅん間、私は飛び上がりそうになるほどうれしかった。でも、喜んではいられない。なにしろ次の試合には私も出るのだ。自分のせいで負けたらと想像するとぞつとした。しかも決勝戦だ。

「もうすぐ始まるよ。」

かんとくの声が聞こえた。そして、かんとくから打順とポジションが言われる。

「二番レフト、真央。」

いっしゅん脳がフリーズする。え、私が二番なの。もしかしたらすぐ交代なのかも。

「はい。」

大きな声で返事をした。すごくどきどきする。大きなプレッシャーに押しつぶされそう。ベンチ前に並ぶ。スーつと深呼吸をする。相手チームとしん判に

「お願いします。」

とさげふ。試合中は、常にきん張が私の中をかけめぐっていた。私の第一打席。どくどく。どくどく。ああ、ストライク。あ、これもスト

ライク。ああ、ついに三しん。貴重な一打席を無だにしてしまった。チームの子たちがどんどん打っていく。私は、取り残されたような気持ちになった。そのまま時間が流れていく。そしてむかえる、第二打席。スーハー、スーハー。深呼吸して落ち着いていく。ピッチャーをしつかり見て、バットを構える。時間がゆったり流れる。バットにボールが当たる感覚がする。次のしゅん間、ボールは遠くへ飛んでいた。うれしくて、うれしすぎて走るのを忘れるところだった。その後も西尾チームは打線をつないでいき、私はホームを踏むことができた。チームのみんながハイタッチをしてくれた。自分でホームを踏むのは初めてだ。そして、九回裏。味方のピッチャーがスリーアウトを取る。私たちはピッチャーにかけ寄った。閉会式になり、私たちはメダルをもらった。裏を見ると、優勝という文字が、ほこらしげに輝いていた。がんばりの証が目に見える形で残ったみたいでうれしかった。家に帰ると、テレビで見ていたお母さんが、

「努力の証だね。」
とほめてくれた。

多分私は、このことを忘れない。心の中に留めておきたい、そう思った。この経験を通して私は成長できたから。

※ 今回の経験で野球を好きになり、楽しむことができるようになりましたね。きん張する中で、チームのためにがんばろうと前向きな姿が書かれています。試合に向けてこつこつ努力を積み重ねたからこそ、成長することができたと感じました。優勝おめでとう。
(早川 奈見)

ザーリが教えてくれたこと

六年四組 手嶋 紗希

「ザーリ、ちゃんとえさ食べるんだよ。」

私はそう言って、毎日えさをあげる。ザーリは、公園の池で私がつったザリガニだ。カサカサと動く六本の足と、大きくて真っ赤なはさみが二つ。その大きなはさみの下には小さなはさみが二つある。ザリガニは、外来生物だから、育てられなくなったからといって、放しているものではない。そこで、毎日えさをあげることに、一週間に一回水を変えること、そして、じゅ命で死んでしまうまで育てることをお母さんと約束して、飼うことにした。

ザーリが来て一週間が経ったころ、ザーリが初めてのだっ皮をした。半とう明の皮を見た私はびっくりして、

「ザーリ、あれ。だっ皮したの。皮にびっくりした。」

と笑いながら言った。ザリガニを飼うのは初めてで、さらにだっ皮を見るのも初めてだった。だから、この皮をどうしたらいいのか分からなかった。調べてみると、「ザリガニは、だっ皮に失敗すると死んでしまう生き物です。だっ皮の後には命がけでつかれているので、自分の皮で栄養を補給します。だから、皮は取らないようにしましょう。だっ皮は二週間に一回します。」と書いてあった。それを見た私は、ザリガニは命がけの行動を二週間に一回しないといけないのだ。かわいそうと思った。そこで、ザーリに向かって、

「ザーリ、おつかれ様。だっ皮つかれたね。明日からもおたがいがんばろうね。」

と声をかけた。ザーリががんばっているから、私も学校をがんばろうと思った。

ザーリが家に来て一週間が経ったころ、水かえをしようと思った。ザーリを別の水そうに移して、スポンジで一生存けん命そうじをした。ぴかぴかになった水そうにザーリを入れた。すると、水そうに入っている土管の中に、後ろ歩きでゆっくり入っていった。ザーリが、きれいになった水そうを喜んでくれているように感じた。私は、一生存けん命そうじをがんばってよかったと思った。

ザリガニの特ちょうでもある、後ろ歩きを連続でする動作のことを、私の中では、「ザーリダンス」と名前を付けた。いっしょにザーリダンスをおどったり、ザーリがえさを食べるときの真似をしたりと、ザーリといろいろなることをした。そんなザーリは、私にとっての大親友だった。

だんだん気温が上がってきたころ、ザーリが家に来て三か月が経った。七回目のだっ皮をむかえようとしていたとき、とつ然何かがなくなった気がした。気のせいだと思い、いつも通りザーリにえさやりをしようと思つた。水の中をのぞくと、水にうかんだザーリがいた。私は、まさかと思つて、つんとザーリをさわってみた。私がさわると、いつもなら土管の中に入っていくザーリが、今日はびくともせず、ういているだけだった。私は、いやな予感がして、お母さんに、

「ザーリが動かなくなってる。どうしよう。」

と大きな声で言った。お母さんは、

「もしかしたら、暑すぎて死んじゃったんじゃないの。」

と小さな声で言った。私は、うそだと思い、ザーリがいる水そうに向かって、

「ザーリ。いつもみたいに後ろ歩きしてよ。ザーリダンスでもいいよ。」

聞こえてる。」

と水そのうちまでひびくように、大きな声で言った。どれだけ大声を出しても、ザーリは動かなかった。お父さんが、

「言いたくはないんだけど、ザーリは死んじやったんだよ。」
と悲しい声で言った。私は、

「昨日は、しっかりえさを食べてたよ。」

と泣きながら言った。そのとき、大事な言葉が頭をよぎった。その言葉は、ザーリが初めてのだっ皮をしたときに、調べて見つけた言葉。

「ザリガニは、だっ皮に失敗すると死んでしまう生き物です。」という言葉だった。ザーリを見ると、顔にだっ皮したときの皮が付いたままになっていた。だっ皮がうまくできなかったのだと思った。

どんな生き物にも命がある。その大切な命は、どれだけ大切にしてみつかはなくなってしまう。そのときに、今までの当たり前が当たり前ではないことに気付く。ザーリと過ごした何気ない毎日が、当たり前ではなく、特別だったことを、ザーリから教えてもらった。

「ザーリ。とても大切なことを教えてくれてありがとう。」

※ 大切に育てていたからこそ、ザーリが亡くなってしまったとても悲しかったと思います。しかし、紗希さんがザーリといっしょに過ごした時間は、改めて命の尊さについて考えることができた大切な時間になりましたね。

(鈴木 麻友)

ほくのおじいちゃんたち

六年ひまわり一組 柴田 航瑠

ほくのおじいちゃんは、安城と名古屋に住んでいます。おじいちゃんたちは、ほくを遊びに連れて行ってくれたり、勉強を教えてくださいと、とても優しいです。

今年、二人は大きな手術をすることになりました。ほくは、とても心配でした。元気になってくれるかなと、どきどきしました。

安城のおじいちゃんは、昔からこしを痛めていたけど、高校生のころ三段とびの選手でした。

「じいじは、国体で四位になったんだぞ。」
とよく自まん気に話しています。

年を取ってから、スポーツこういしょうが出るようになって、こしを痛そうにしているときがありました。だけど、山登りをしたり、キャンプを楽しんだりしていました。昨年、重たい物を持ったときに、こしの痛みが悪化してしまい、今年の一月には、歩くのも一苦労になってしまいました。そして、手術することになりました。病名は、せきちゆうかんきょうさくしょうです。せきちゆうかんの神経にいくつかの欠けた骨がささって、こしや足に強い痛みやしびれを起こしていました。欠けている骨をけずり、神経に当たらないよう手術をしました。入院中、おじいちゃんは、

「病院のご飯はまずい。」

「退院したら沖繩に行きたい。」

「とんかつが食べたい。」

と行っていました。そして、退院の日、念願のとんかつをみんなで食べに行きました。

「とんかつは、うまいなあ。」

とても喜んでいました。それを見て、ほくもうれしくなりました。

名古屋のおじいちゃんは、今年の健康しんだんで胃がんが見つかりました。毎年、健康しんだんを受けていたけれど、昨年の検査では見つかりませんでした。はき気や痛みもなかったので、気がつきませんでした。おじいちゃんのがんは、胃のかべの五層目まで進行していました。約二センチの大きさのがんで、胃の三分の二を切除することになりました。手術は成功し、ほくは安心しました。ますいから目が覚めてからは、激痛との戦いです。痛くても、歩いたりリハビリをがんばったりしないといけません。また、入院中は、流動食という液状の食事で、おじいちゃんは、

「ご飯がまずい。」

「ウナギが食べたい。」

と行っていました。安城のおじいちゃんも同じことを言っていたなあと思ひ出しました。病院のご飯は、そんなにまずいのかと思ひました。

予定通り退院ができて、家ではふつうのご飯が食べられるようになりました。だけど、よくかまないといけないので、時間がかかります。すぐお腹がいっぱいになるので、一食の量を少なくして一日に五食ぐらい食べています。念願のうなぎも食べることができました。

安城のおじいちゃんも、名古屋のおじいちゃんも、元気になってうれしいです。安城のおじいちゃんは、大好きな車に乗ってキャンプに行けるようになりました。ほくもいっしょに行きたいです。名古屋のおじいちゃんは、退院したばかりで、まだお腹の傷が痛むみたいです。でも、入院前に日本一周してみたいと言っていたので、ほくもおじい

ちゃんといっしょに旅行を試してみたいです。

ぼくは、おじいちゃんたちの手術やリハビリを見て、大変だなあと
思いました。だから、ぼくは、これからもずっと健康でいたいなあと
思います。そのためには、好き嫌いをせずに何でも食べます。それか
ら、早ね早起きをしたり、少しでも体を動かしたりしたいと思います。

※ おじいちゃんたちを見て、航瑠さんも健康に気をつけたいと思
うことができました。おじいちゃんたちが、元気になったら、い
っしょに旅行やキャンプに行けるとよいですね。(杉浦 由有子)

わたしのヘアゴム

一年一組 近藤 葵

ヘアゴムをかってもらった
ほうせきがついてきらきらした
かわいいヘアゴム
たのしみになっていたヘアゴム
まい日まい日つかった

一しゅうかんご
あたらしいヘアゴムをかってもらった
大きめのリボンのかわいいヘアゴム
かってもらうたびに
どんどんふえていくヘアゴム
すきなものがいっぱい
まい日なかなかえらべない

すこしたってから
ヘアゴムをかってもらった
とてもきれいなピンクのお花のかたち
ずっと
こんなヘアゴムがあればな
とあたまでえがいていたヘアゴム
それからは、まい日、
わたしのあたまは、

お花ばたけみたいにきれい

でも、毎日つかっていたから、
ある日、お花がとれてしまった
かなしくてなけてきた
おかあさんは、

「また、おなじようなものをかってあげる
よ。」

といったけど、
こわれたあのヘアゴムが大すき
もう、つかえなくなっただけど、
することはできない

とれたお花は、大じにしまっておこ
う

こわれたヘアゴムも
ほうせきのヘアゴムも
リボンのヘアゴムも
ぜんぶ大すきなたからもの

※ かってもらったお気に入りヘアゴムの
たちを大せつにする葵さんの気もちがつ
たわってきます。これからも、ものを大せ
つにする気もちをもちつづけてください。

(近藤 利枝)

わたしのかぞく

一年二組 齋藤 瑠乃

わたしのおねえちゃんは、こはる
こはちゃんとよんでいる

小学校三年生

空気がよめものしり

こはちゃんとあそぶのが、わたしはだいす
き

いつもいっしょに学校にいつてくれるから
わたしは、あんしんして学校にいけるんだ
こはちゃんは、あこがれのおねえちゃん

わたしのおとうさんは、りょうすけ

お父さんとよんでいる

パソコンのしごとをしている

お父さんは、おもしろくて力もち
いっしょにいろいろなげしよにお出かけを
してくれる

とくにおんせんがすき

わたしは、お父さんのことがだいすき

わたしのおかあさんは、えみこ

お母さんとよんでいる

エステサロンのしごとをしている
おきやくさまのおはだをきれいにするしご
と

ねるまえにわたしをぎゅつとしてくれる

なによりお母さんの手がだいすき

だっておちつくんだもん

お母さんは、わたしのことがだいすきすぎ
る

わたしもお母さんがいちばんすき

わたしのおばあちゃんは、ひろこ

ばばとよんでいる

いつもえがおでうたがすき

いつもごはんをつくってくれる

ばばがつくるごはんは、ぜんぶおいしい

ばばみたいに、りょうりができる女の子に
なりたくない

わたしのおじいちゃんは、きよはる

じじとよんでいる

くいしんぼうでねてばかりとおもいきや

じじは、きょうでぬりえがじょうず

おかしをくれたり、ゲームをいっしょにし
てくれたりする

さいこうのともだち

だいすきなかぞく

ずっとずっとよろしくね
けんこうに気をつけて
これからもしあわせにくらそうね

※ 瑠乃さんのかぞくのことや、かぞくへ
のおもいがたくさんつたわかりました。これ
からもけんこうに気をつけてなかよくすご
してくださいね。
(高木 詞音)

がんばっていること

一年三組 池田 桃菜

一年生になってがんばっていることがある
学校でうえたあさがおに

まい日水やりをして

げん気にそだてること

はちに土を入れて

たねをまいたとき

きれいな花をさかせてほしくて

がんばろうとおもった

学校でそだてているときは

まい日水やりをした

ぐんぐん大きくなって

いろいろないろの花をさかせてくれた

うれしかったから

かぞくが学校にきたとき

「見て。大きいでしょ。花がたくさんさい

たよ。」

といてじまんしちゃった

おばあちゃんに

「きれいだね。たくさんさいたね。」

といってもらった

しゃんもとってくれた

みんながほめてくれたり

かんどうしてくれたりして

うれしかったから

もつとがんばってそだてようとおもった

なつ休みに入ってから

まい日あさがおのおせわをがんばった

かんさつもしている

すこしかれてきてしまっているけれど

まだまだ花をさかせてくれるから

がんばってそだててあげたい

あさがおをそだてて

がんばろうとおもう気持ち

うれしいとおもう気持ち

がんばってよかったとおもう気持ち

いろいろな気もちをかんじることができた

これからもこの気もちをわすれずに

どんなこともさいごまでがんばってやりた

い

あさがおさん

げん気にそだててくれて

きれいな花をさかせてくれて

ありがとう

※ あさがおは、桃菜さんがいっしょうけんめいおせわをしてくれてよろこんでいるとおもいます。あさがおがおしえてくれたいろいろな気もちを、これからも大せつにしていってくださいね。(都築 あやめ)

ぼくのマナカ

一年四組 神谷 一希

「一年生になったから、じぶんのマナカがかえるよ。」
ママにいわれてぼくはとてもうれしくなつた

ぼくは、小さいころからでん車が大すきやすみの日にはよくでん車でお出かけをする
ピッ
かいさつで、おとなみたいにマナカでとお
それがぼくのゆめ

ある日
「あしたマナカをおおうか。ばあんのとお、ママがいった
うちへいこう。」
やったあ
いそいでひき出しからマナカケースを出した
めいてつパノラマカーのケースだ
リュックにしまつて

どきどきしながらねむりについた

つぎの日

さくら町まええきから、かな山えきへマナカをかうためにまど口にならんだ
どきどきがとまらない
なまえをかいいたしんせいしよをにぎりしめた

いよいよぼくのばん

ちゃんともらえるかなとおもっている

「はい、どうぞ。」

ぴかぴかのマナカをわたしてくれた

ぼくのマナカだ

うれしくて、うれしくて

こころの中で

やったあとさげんだ

「ちかてつにのるよ。」

ママがいった

かいさつ口までスキップした

「よし、いくぞ。」

またどきどきしてきた

ちゃんとおれるかな

ピヨピヨ

とおれた

「いつきのマナカはかわいい音がするね。」
ママがうしろからいった

ふりかえるとママがカメラをむけた
おもいきりピースをした

すこしおとなになった気もちになった

ばあんのまつえきについた

はやくマナカを見せたくて

ついついあるくのがはやくなってしまう

二かい目のかいさつ

ピヨピヨ

なんかいきいてもうれしいな

かいさつを出たらばあんがいた

にこにこして手をふっている

「こんにちは。よくきたね。」

「見て見て。ぼくのマナカだよ。」

ばあんにマナカを見せた

「すごいね。かっこいいね。」

ばあんがほめてくれた

はじめてじぶんのマナカでのつたでん車

いつもよりのしくて

またいろいろいってみたいとおもった

これからもよろしくね

ぼくのマナカ

※ はじめてじぶんのマナカで、でん車にのり、どきどきしながらも、うれしくてス

キップしてしまいう一希さんのようすが目
にかかびます。これからもじぶんのマナ
カで、いろいろなどころへ出かけてくだ
さいね。

(濱崎 文香)

むかしの友だちとおまつり

二年一組 栗山 大生

今日はほいく園の友だちとまつりに行く
ほくだけがちがう小学校
みんなに会うのが少しきんちようする
みんなほくのことをおぼえているかな
みんなと楽しくすごせるかな

まち合わせ場しよになつかしいみんなの顔
「たあおほ。」

大きな声でよばれて走って近づく
みんなかわってない
なつかしいな

「ひさしぶり。」
ゲームやそれぞれの小学校の話
ならいごとの話

ほくたちの話は止まらない
おまつりにむかう間も楽しくてしかたない
「走っちゃだめ。」

ママたちの声にしてもほくたちは止まらない
夕方だけどまだあつくてふくが体にくっ
つく

おいしそうなおいがながれてくる
たくさんの声でわいわいガヤガヤ

こうふんしないわけがない

「何食べる。」

「わなげしよう。」

そうだしながら人ごみをすすんで行った

気づけば夕方から夜になっていた

おまつりももうすぐおわりをむかえる

明日からまたほくだけがちがう小学校だ

ばいばいするのはさみしいけれど

だいじようぶ

会えばまたむかしのよう楽しくすごせる

またあそぼうね

来年もいっしょうに行こうね

※ 同じ場しよにかよっているから友だち
になるのではなく、いっしよにすごした時
間で友だちになります。これまでの時間と
これからの時間を大切にすごしてください。

(間宮 圭太)

リレーせん手

二年二組 堀 蒼人

「よいい、どん。」
先生の声がひびいた
リレーせん手をきめるレースがはじまった
一いと二いがせん手になれる
せん手になりたい
一いになるぞ
心の中でさけんだ
一になれるようにいっしょうけんめい走
た
けっかは二い
やった
二いでせん手になったぞ
うれしい
家に帰ってすぐに
「うんどう会のリレーせん手になれたよ。」
お母さんに言うと、
「すごいね。おめでとう。」
もっとうれしくなった
「本当に。」
お兄ちゃんがびつくりした顔で言った
みんなおどろいた

そして みんなよろこんでくれた
もっともっとうれしくなった

いよいよれんしゅうがはじまった
走るじゅん番でならぶれんしゅう
コースのはしり方
バトンのわたし方
じっさいに走ってみた
バトンパスがうまくいかなかった
むずかしい
けっかは三
くやしかった

うんどう会の前日
ようち園のうんどう会で
ころんだことを思い出した
明日ころばないか心ばいでいっばいにな
た
お母さんに
「リレーでころばないか心ばいになってき
た」
と言うと
「ようち園の時は、前の日に雨がふってし
ばふがぬれてすべったけど明日は晴れる
から
だいじょうぶだよ。」
少し心ばいがへった

「みんなでおうえんに行くからね。がんば
って。」

この一言で、心ばいがやる気にかわった
ぜったい一いになるぞ
心の中でちかった

まちにまったうんどう会
いよいよこう白たいこうリレーがはじま
た

ぼくの番が来るのが、楽しみになってきた

「いちについて、よいい。」
バン

ピストルの音が鳴った
一年生がスタートした

四人目がぼくの番

ぼくにバトンが回って来た

四いできがひらいている
前の子をぬこうと、いっしょうけんめい走
た

けっかはかわらず四いだった
くやしかったけど

さをちぢめることができて
うれしかった

また来年もリレーのせん手になりたいな

※ リレーせん手になれてうれしい気もち

がよくつたわりました。ふあんな気もち
をのりこえて本番をむかえ、いっしょう
けんめい走った蒼人さん。来年もリレ
ーせん手になるとよいですね。

(脇田 富久代)

おいしかったオクラ

二年三組 春日井 柚子

生活科のじゆぎようで
オクラをそだてた
自分でそだてたら
もっとおいしいかなと思ったから

オクラのなえうえ
風が強すぎてくきがたおれそう
だいじょうぶかな
くきがおれないかな
心ばい

毎日の水やり
「おいしくなあれ。おいしくなあれ。」
いつものおまじない
本でしらべる
八センチになったらしゅうかくしていい
何月に何をするよ
まだオクラの花だけだけど
本のオクラはけっこう大きい
早くオクラができないかな
ひりょうをあげた

オクラのりょうりしらべ
オクラの肉まきおいしそう
作り方を紙に書いてもち帰った

お母さんとオクラの肉まき作り
お肉をまくのがむずかしい
食べたら

いつもよりばいおいしい

自分で心をこめてそだてたからかな

お父さんも妹も

「おいしかったよ。」

とえがお

うれしい

また自分のオクラをそだてて

肉まきを作りたいな

※ 自分でそだてた野さいはかわいくて、
大切にそだてることができましたね。お
店で買うオクラよりも、お母さんが作っ
たオクラの肉まきよりも、自分で作ると
何ばいもおいしくなりますね。

(鈴木 菜穂子)

子どもキャンプへ行つたよ

二年たんぼぼ一組 熊澤 幸希

友だちと子どもキャンプへ行つたよ

朝 こどもの国まで車で行って

お母さんとばいばい

少しさびしかった

まずは はじまりの会

四チームに分かれる

ぼくと友だちは同じチーム

うれしかった

じこしようかい

とてもどきどき

つぎは 車にのってキャンプ場へ

お昼ごはんのじゅんび

サラダうどん

レタスを切った

うどんはにがてだけど

ぜんぶ食べた

友だちは

「おかわり、おかわり、おかわり。」

たくさんおかわりをした

たくさん食べるなあ

お昼ごはんの後はプール

友だちとボールであそんだ

楽しかった

つぎは スイカわりのよていだったけど

やらなかった

先生が切ったスイカを食べた

スイカわりやってみたかった

さんねん

スイカはおいしかった

夕方は カレー作り

ぼくのかかりは にもつはこびとかたづけ

みんなで作ったカレー

とてもおいしかった

ごはんの後は キャンプファイヤーと花火

こわくて自分で火をつけられなかった

なれたらつけられるようになった

花火はバチバチ

楽しかった

花火の後は おふろに入って

ねるじゅんび

テントでねるよていだったけど

あつすぎて中止

クーラーのへやでみんなでねた

みんながずつとうるさくて

あまりねむれなかった

朝は 牛にゆうパックでホットドック作り

作り方はおぼえた

家でも作ろう

一番おいしかった

さい後にみんなでふりかえり

ぼくが一番思い出にのこったのは花火

絵日記も書いた

先生が

「来年もおいでね。」

と言った

帰りは 友だちのお母さんのおむかえ

つかれてすぐにねた

おうちに帰って お母さんに会った

会えてうれしかった

お母さんが言った

「このぶつぶつ、どうしたの。」

手と足と口がぶつぶつしていた

びょういんに行ったら手足口びょうだった

お母さんが

「キャンプでびよう気のおみやげをもらっ
て

きたんだね。」

と言った

つかれたし びよう気になったけど

キャンプは楽しかった

来年もまた行きたいな

※ はじめてのおとまりキャンプ。みんな
できょうりよくして、たくさん
のこを
体けんしましたね。これからも、いろいろ
なことにちようせんしていきましよう。

(小島 恵子)

こてつつの生活

三年一組 三浦 みのり

わたしの家には
ねこのこてつがいる

おはよう おはよう こてつ

スースー

まだねてる

起きて 起きて こてつ

ニャオ

やっとおきたね

ニャオ

ごはんを食べよう

カリカリ

おいしいね

ニャオ

そっかあ

つめを切ろう

ニャオ

かきかき

短くなったね

ニャオ

次は遊ぼう

ドンドン

楽しいね

ニャオ

つかれたね

おやつにしよう

カリカリ

おいしいね

ニャオ

そろそろ夕はんにしよう

カリカリ

おいしいね

お風呂に入ろう

ごしごし

きれいになったね

ニャオ

そろそろねようね

ニャオ

スースー

一日楽しかったね

※ こてつつの鳴き声の「ニャオ」がリズムよく使われていて、まるでみのりさんところ

てつが会話をしているように読むことができます。これからもこてつと楽しくすごしてね。
(手嶋 唯人)

海

三年二組 鈴木 優輔

夏休みに

ぼくは海へ行った

遠くから見たら青色

でも近づいてみたら緑色だった

もぐつてみると茶色にも見えた

海の中には

いろんなものがあつた

どろやすな

大きな赤い魚

海ぶどうのくき

数え出すときりがない

上から見ると

きれいな海

中に何があるかは分からない

思いもよらぬものがあるかも

水面はまるで大きなまくみたい

中身をかくす大きなまく

何色もあるこの海に

ドドンとすわる

このまくを

いつかどかしてみたい

どんなにさわっても

つかめないまく

それが「海」

※ 海を見て気づいたことから想ぞうをふ

くらし、面白い表げんを使うことがで

きましたね。これからも身の回りにある

さまざまなふしぎに目を向けていつてほ

しいです。

(大嶋 初音)

転校

三年三組 滝 香純

四月

新しい学校

せい服のない学校があるなんて

給食のじゅんび時間

タイマーで計るなんて

じゅ業の始まり

「起立」と言わないなんて

新しい先生や友だち

新しい通学路や公園

新しい学校のルール

はじめてのことでいっぱいだ

なつかしい学校

なつかしい先生や友だち

近くを通ると思い出す

なつかしい通学路

白いシャツに黒のスカート

ちよつとせい服がこいしいな

みんな元気にしてるかな

転校して四か月

今の学校

みんなやさしくておもしろい

みんなのおかげで

毎日楽しいよ

みんなのこともつともつと知りたいな

わたしの学校

これからもよろしくね

※ 香純さんがはじめて学校に来た日、少

しふあんもありながら、はじめてのこと

に出会い、目をかがやかせていたことを

思い出します。これからも学校のなかま

と楽しい時間をすごしてください。

(西山 友理)

四年一組にいて分かったこと

四年一組 江原 紬

四年生のクラス発表

三年生のころ仲の良かった友達と

はなれてしまった

ショックで

下を向いて

のそのそと教室に入った

一年生のころに同じクラスだった子が

いっしょのクラスだね

と言ってくれた

よかった

少しほっとした

最初は

その子としか話せなかった

もっと友達をふやしたいな

いろいろな子と話したいな

と思っていたけど

わたしは自分から話しかけることが苦手だ

はずかしいし

仲良くなれるか心配だから

ある日

友達と話していると

近くの席の子が話しかけてくれた
自然とわたしも話すことができた

話を聞いてくれてうれしかった

それから

その子とも話すことができるようになった

一か月たつころには

クラスのほとんどの子と

話すことができるようになっていた

こんなにするなりと話すことができるよう

になったのは

初めてだった

すぐくうれしかった

二か月たつころには

クラスのみんなと話したり

遊んだりするようになった

気づいたら

自分から話せるようになっていた

しかもすんなりと

友達と話すことができるようになって

うれしいし

毎日が楽しい

一年生のころはクラスになじめなかった

けど今はちがう

自分の成長を感じた

話せるようになったのは

クラスのみんなのおかげでもある

このクラスでよかった

はじめはショックな気持ちで

スタートしたけど

今ではこのクラスが好きになっていた

四年生になって三つ学んだことがある

一つ目

知らない子とも友達になれること

二つ目

みんなのおかげで自分が成長できたこと

三つ目

成長するとこんなにもうれしい気持ちにな

ること

五年生のクラスはどうなるか分からない

もしかしたら友達が少ないかもしれない

けど大丈夫だろう

わたしは成長できたから

これからも四年一組で学んだことを

大切にしていきたい

※ 最初は心配でも、だんだんと仲良くな

っていったことが紬さんの気持ちとと

もに伝わってきます。この成長を今後の

学校生活に生かしてください。

(石原 誠)

走るぞ、新

四年二組 岸本 新

「はる、新、いっしょに走るか。」
と、お父さんが言った。

夕方
ぼくは、お父さんとお兄ちゃんと走る

お母さんは自転車だ

六時半ごろ

外は生ぬるい風

げん関を出てすぐ

走るのがいやになってくる

お母さんが、

「さあ、行くよ。」

声をかけてきた

しょうがない

がんばるか

お母さん自転車ずるいぞ

ぼくの横で

「すずしくて気持ちがいいね。」

と、お母さんが言う

ぼくは、あついんだけど

あせがどんどん流れてくる

耳の前の方から

ほっぺたに

かたとせなかに
かみの毛もびっしよりだ

「新ちゃんがんばって。」

お母さんの声

お兄ちゃんがペースを上げる

負けたくないから

ぼくもペースを上げる

おなかがいたい

ちよつと歩いちゃおつかない

「もう少しだよ。」

「がんばって走ろう。」

お母さんの声が

ぼくのせなかをおす

ようし

最後はお兄ちゃんときょう走

ぼくの足が速くなる

家がだんだん近くなってきた

もうちよつとだ

最後の坂

「ゴール。」

大きな声でぼくが言う

たくさんのあせをかいたから

お茶がおいしい

「新がペースを上げるから、大変だったぞ。」

と、お兄ちゃんが言う

「毎日続けられるといいね。」

とお母さん

明日も走るのか

※ 家族全員で走っている様子が目に浮かびます。はじめは走るのがいやだった新さんが走っていくうちに楽しさを感じているようです。力をつけていってほしいです。

(木内 愛弓)

一つのボールで

四年三組 泉 星成

ドス、ドス、ドス
ボールを当てるぞ
一つのボールで楽しいな
ドッジボール

バコン、バコン、バコン
一つのボールをナイスキャッチ
ぼくは、ボールを受けるのが苦手
自転車ぐらいの速さの友達のボール
とれるとうれしい

※ ドッジボールのボールが飛び交っている様子がとても伝わってきます。これからも友達と楽しくドッジボールで遊んでくださいね。
(加藤 由似)

シュツ、シュツ、シュツ
一つのボールからにげ回る
ぼくは、ボールをよけるのが苦手
外野からのパス回し
高速回転ずしみたいに目が回る

ドス、ドス、ドス
一つのボールで相手を当てる
ぼくは、こうげきするのが好きだ
仲間のパスから
すばやくこうげき体せい

バコン、バコン、バコン
ボールを受けるぞ
シュツ、シュツ、シュツ
ボールをよけるぞ

笑顔大作戦

四年四組 板倉 佑心

ほくの大切な人を笑顔にさせたくて
ほくは笑顔大作戦を実行した

花の水やりをした

ばあちゃんが笑顔になった

作戦成功

アニメのワンピースの話をした
じいちゃんが笑顔になった

作戦成功

ほくのおかしを分けてあげた
妹が笑顔になった

作戦成功

おもしろい動画を見せてあげた
お姉ちゃんは笑わなかった

作戦失敗

ソフトの練習で上手くいった話をした
お父さんが笑顔になった

作戦成功

外で元気よく遊んだ

ごはんをいっぱい食べた

お手伝いをした

お母さんが笑顔になった

作戦成功

みんなが笑顔になって

ほくも笑顔になった

これからもみんなを笑顔にさせたい

笑顔大作戦成功

※ 佑心さんが、家族のために作戦を実行
している様子が目にうかびました。みんなが
笑顔になってくれると、自分も幸せな気持ち
になれますね。これからも、いろいろな作戦
を実行してください。

(黒野 淳美)

けん道をやる

五年一組 神取 輝

わたしは四年生の時にけん道を始めた
六年生の兄がやっていたからだ

けん道はカッコいい

道着もはかまも

兄がけん道をするまで見たことがなかった
わたしもやってみたいな

「やってみよう。」

母に言った

「本当にできるの。」

何度も母に聞かれた

「できる。やりたい。」

と言いつづけた

十月になって、ついにけん道を始めた

道着もはかまも

最初は着られなかった

練習しているうちに

自分一人で着られるようになった

面もどうも小手も着けられる

自分でできることが増えてきた

小手面、合わせ技

先生が教えてくれる

自分ではできていないつもりだけれど

できていないと先生に言われる

だから、しっかり打てるように

何度も練習した

五年生の四月に級しん査を受けることにし
た

しん査を受けるのは初めて

きん張する

でもずっと練習してきたことだから

だいじょうぶと思っていた

けれど、本番の準備中

まだ面もかぶっていないのにどきどきした

いよいよ始まった

待っている時とは少しちがうどきどきだ

相手と一足一刀になった

思い切って

「やあ、面。」

しん査が終わった

きん張して声がいともより小さかった

声が小さかったから、少し自信がなくなっ
た

終わって少し時間が経ってから、結果が出

る

どきどきした

結果が発表された

わたしの受しん番号に丸が付いていた

合格だ

がんばってよかった

次からは木刀も使う

覚えることが増える

大変だけれど、自分がやりたいと言ったこと

だからがんばる

※ だんだんとできることが増えていくのはとてもうれしいですね。けん道は心技体がそろっていることが大事だそうです。輝さんの技術も心も成長していることがよく伝わってきました。これからもがんばってくださいね。
(渡邊 航成)

夏は、暑いけれど

五年二組 犬塚 大勝

夏は暑いけれど
海やプールなど
入ると気持ちいい

夏は暑いけれど
アイスやかき氷
食べると体が冷え
元気が出る

夏は暑いけれど
祭や花火
見ているとすごく楽しい

夏は暑いけれど
虫の声や自然の音が
聞こえてくることもある

夏は暑くて
宿題がめんどくさいけれど

夏だっということがある
みんなも少し休んで

楽しみを見付けよう

※ 夏は暑く、夏休みの宿題もありますが、暑さのおかげでいろいろな良さに目を向けることができましたね。これからも身の回りにあるものの良さを感じ取っていきましょう。

(三浦 千鶴)

がんばればよかった

五年三組 若松 沙奈

がんばってやろう

※ 試合に負けたことで、心のもやもやに
気付き、沙奈さんが成長をしたことが伝わ
ってきます。次の大会ががんばってください。

(稲垣康弘)

わたしは、ドッジボールを習っている
大会に向け、日々練習している
正直、練習はあまり好きではない
そして、ついに大会がやってきた
最初は、なんとも思わなかった
「負けてもいい。」
と思いつつ、試合をした
結果は、負けた
なんとも思わないはずだが
なぜか心かもやもやしている
ちよつと悲しくなってきた
周りの子は泣いている
最初は負けてもいいと思った
だけど、自分も泣きそうになり
「負ける」
という言葉の意味が分かった気がする
最初からがんばってあげればよかった
こうかいした
次の練習からは
「優勝するためにがんばるんだ」
と思いつつやろう
絶対にこうかいしないように

一人前の自分への道

五年四組 長柄 拓見

なかなか手強い
やっとできた達成感

家庭科の授業でさいほうを習った
初めてはりと糸を使った

玉止めの手順がややこしい

糸がからまる

いらいらする

でも、かがりぬいは上手くできた

ぬえると気持ちがいい

家に帰って、はいていたくつ下の親指が

破れていたからぬってみた

かがりぬいでちくちく

初めての玉止めも上手にできた

お母さんに見せに行った

もっとぬえるものないかな

お母さんが

ぼろぼろに破れた水とうカバーを持ってき

た

張り切ってぬい始めた

ちくちくちくちく

まだあるぞ

ちくちくちくちく

少し大人になった気持ちになった
一人前の自分への道
これからも一人前になれるように
勉強がんばるぞ

※ 家庭科の授業で習ったさいほうを通して、一人前に近づこうとする拓見さんの思いが伝わってきました。一人前の自分への道が切り開けるようにこれからもいろいろなことにちよう戦していつてくください。

(中村 桃奈)

パフエバー

六年一組 福田 綾乃

まず、フレークを入れる
ザクザクザク

次はヨーグルトを入れる
ポトポトポト
少し少なめに

次はフルーツ
見栄えがよくなるように
みかん、パイナップル、みかん、パイナップ
ルと交ごに並べる

その上にチョコソースをかける
ベチャボチャボチャ
あまいにおいがただよ

いよいよラストスパートのソフトクリーム
深呼吸をし
グラスをかまえ
レバーをにぎる
ゆっくりとレバーを下ろす
最初は大きく円を描くようにグラスを動か

す

そして円を小さくしていく

最後がかんじん

レバーをもどすと同時にグラスを下げる

完成

見栄えはますます

味はうまうま

次はもっと見栄えをよくしたい

君だったらどんなパフエをつくる

※ パフエを作る一つ一つの工程に対して
の気持ちがいっかりとこもった詩に仕上
げていますね。目の付け所が違うなど感
心しました。最後の問いかけで読者も引
き込む工夫が素敵です。(糟谷 昌輝)

ミラとみら

六年二組 山口 みら

望遠鏡をのぞくと

ほんやり赤く光る星が見えた

この星こそ私の名前の由来

「ミラ」である

ミラはくじら座の心臓部分にある変光星

三百三十二日かけて

二等星から十等星に明るさが変化する

ミラとの初対面はこの時の望遠鏡越し

本当は自分の眼でミラに会いたい

でも、なかなかタイミングが合わない

今年の四月

ミラはいちばん明るくなった

しかし、ミラは太陽の近くにいて

自分の眼で見ることができなかった

実にもやもやする

くじら座は秋の星座

人間の眼で見えるためには

六等星より明るく

夜にミラが空に在る必要がある

私はいつ自分の眼でミラに出会えるのか

まるで織ひめとひこ星のようだ

私の名前がなぜ「みら」かというところ

ミラのようにかがやきいろいろな表情や

才能を見せてくれる子に育ってほしい

というお父さんお母さんの願いが

こめられているようだ

実際の私はどうだろう

何事にも一生けん命がんばるのが私の長所

でも、おこられるとすねてしまう

大好きなピアノをひいているときは

きつといい顔をしている

お気に入りのテレビを見ているときは

げらげら笑っている

ペットと遊んでいるときは

いやしの顔をしているのだろう

周りからは「しっかり者」と言われる

けれど、家では

片付けしなくてだらしないって言われる

ふり返るだけでいろいろな私がいる

でも、自分の夢をかなえるために

絶対に努力を続ける私でありたい

みらという名前にはずかしくない

私であるように

いつかこの眼でミラに会えた時

「私がんばってるよ」って

堂々と胸を張って言えるように

きつとミラは空からいろいろな表情で

私を見守ってくれている

ミラに会える日が楽しみだ

※ 夜空を見上げながらミラを探している

みらさんの様子が目にうかんできます。

ミラに会うまで、これからもいろいろな

表情を見せながら、夢に向かって努力を

し続けてください。応えんしています。

(大輪 賢哉)

大好きなひいおばあちゃん

六年三組 瀬戸 結奈

良いことをするとほめてくれる
みんなが大好きなひいおばあちゃん
やっばりお別れはさみしいけど
ずっと空から見守っていてね
最後にみんなで南無阿弥陀仏

ポクポクポクポク
おしょうさんが木魚をたたく音
ポクポクポクポク

お寺にひびく

ひいおばあちゃんの一周き

久しぶりに会う親せき

少しどきどきする空間

お経が終わった

お経から説法へ

おしょうさんの説法は長い

内容が難しくてあきてしまう

思い出すのは

大好きな優しいひいおばあちゃんのこと

いつも笑顔がかわいくて

私が作った卵焼き

ひいおばあちゃんが食べて

「上手だね。」

私がかいた絵

おばあちゃんとひいおばあちゃんの顔

賞に入って

ほめてくれた

その後みんなでおいしい食事
エビフライ

ひいおばあちゃんの大好物

またひいおばあちゃんを思い出す

これからも私の心の中には

笑顔のひいおばあちゃん

ずっとずっと大好きだよ

※ ひいおばあちゃんとの思い出が、次々
によみがえり、一周きの時間を大事に過ご
したことが伝わります。ずっと見守ってく
れるひいおばあちゃんにこれからも手を合
わせ、ひいおばあちゃんが笑顔になる報告
をしていきましょう。(早川 奈見)

小さな宝物

六年四組 迫 柚羽

「もうすぐお姉ちゃんになるよ。」
お母さんとお父さんに言われた
ずっと待っていた言葉
家族みんなが待っていた言葉
うれしくてなみだが出た
言葉にできないくらい胸が熱くなった
こんな気持ちは初めてだ
まだ豆つぶくらい小さな命
こんなに小さな君が大きくなれるか心配だ
早く君に会いたい
君はどんな顔かな
どんな目をしているのかな
どんな手をしているのかな
どんな足をしているのかな
男の子かな
女の子かな
元気に生まれてきてくれればなんでもいい
君はどんなことを好きになるのかな
バレーボールを好きになったらうれしいな
私の宝物のバレーボールで

いっしょにバレーボールをしたい

早く生まれてこないかな
早く君に会いたいな

君がいつ生まれてもいいように
部屋のそうじをするよ
君が危ない目に合わないように
整理整頓して待っているよ

まだ小さな君だけど
もう私の中では大きな存在
私の大事な宝物

家族みんなの宝物
家族みんなが君を待っているよ

おこるとこわいけど
いつも味方になってくれる
優しいお母さん
おこるとこわいけど
私にあまいお父さん
自まんの家族だよ
だから、安心して生まれておいで

早く君に会いたいけれど
君のペースでゆっくり大きくなってね
君に会えるその日まで

ゆっくり待っているね

※ 文末を「うかな」とまとめることで、リズムよく書き進められていますね。詩全体から柚羽さんが家族を思っていて、行動に移す温かい思いが伝わります。

(鈴木 麻友)

「フアーブル昆虫記」を読んで

五年三組 村松 暁

みなさんは、こん虫が好きですか。ぼくは、こん虫が好きです。この本はあまり見られないこん虫が数多く書かれており、こん虫のことについてくわしく知ることができません。フアーブルが、こん虫が好きだということから、様々な発見をするところが感動します。そして、熱心に観察するフアーブルのようになりたいと感じさせてくれます。ぼくは、こん虫の観察の仕方にくわしくなりたかったので、この本を選びました。

フンコロガシは、何度も失敗をくり返しながら、めげずにいどむ力が、ぼくとちがってすごいです。あきらめない強い心におどろきます。ぼくも、フアーブルと同じように虫が好きなので、虫の特ちょうを見つけようと、すぐにつかまえて観察するところは共感しました。

心に残ったことは、三つあります。一つ目は、フアーブルがたくさんいる虫の中で不思議に思った虫を真げんに観察し、体のつくりや能力がどんなものなのか実験をくり

返し調べていくところです。自分が知りたいたいという気持ちから、とことん追究し、実験をした結果どうなったか、フアーブルなりの考えや理由が心に残りました。

二つ目は、図かんでしか見たことのない虫を観察し、どんなふうに生きているのか、どうやってえさを手に入れるためにかりをしているのかを学ぶことができたことです。実際に見てもふれてもいない自分にとって、とても興味深いものがありました。

最後に心に残ったことは、セミのことで。なぜ、セミは音を鳴らしているのか知ることができました。セミが音を鳴らす目的は、おすとめすが交びするためや、向かってくるてきをおどかすためであることが分かりました。また、セミは他の音が鳴ってもいげず、音を鳴らし続けることも印象に残っています。子孫を残すために、必死に鳴くセミのすがたは、自分が今を生きていることの証のように思います。セミの音は、大きさや種類によつてちがうことも分かりました。セミの鳴く音も種類によつて様々です。セミの鳴く音をうるさく思うこともあります。夏でしか聞けないと思うと、地上に出て短い時間しか生きられないセミのことが、とても愛おしく感じました。

フアーブルが虫を観察して気付いたこと、

初めて知ったことは、ぼくにとつて新しい発見でした。この世界で生きている虫は失敗をくり返しながらも、生きていくためにしなければいけないことをまっとうし、次の命にバトンをつないでいく生命力が素晴らしいです。たくさんのてきから命を守りながら、一つ一つ自分の力をみがき、けん命に生きています。ぼくも虫のように、生きるために強く、あきらめない心を大切にしていきたいと思います。

※ フアーブル昆虫記を読んで、暁さんが実生活に生かしたいことが書かれており、暁さんの成長を感じるのですが、きました。「あきらめない心」を大切に、これからもねばり強く様々なことに取り組みんでいきましょう。(稲垣 康弘)